
ONE PIECEの世界に転生

鷹の爪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECEの世界に転生

【Nコード】

N1436Z

【作者名】

鷹の爪

【あらすじ】

主人公の翼は、

ある日、自分の書こうとしていた二次小説の主人公に転生（憑依）する。

原作に大幅な介入はしません。

作者は初心者なので過度な期待をしないで下さい。

転生？

「あーあ 今日も疲れたなあー。」

ガチャッ

「ただいま。」

「お帰り。」

台所から母さんの声がする。

俺の名前は翼つばさ 高校3年生だ。
俺はこの物語の主人公なんだ。

「とか現実逃避してる場合じゃねえんだよなあ、
受験勉強しなきゃいけないんだった。」

「ふうー 一段落ついたし休憩すっかな」

俺はベッドに散らばった漫画『ワンピースONEPIECE』を適当に手に取り読み出した。

「やっぱりロブ・ルッチつええな。」

「ホントおもしれえよな。」

いいよなあ行ってみてえよワンピースの世界。

「ゲッポウ月歩」とか「トリトリの実」の能力使ってノリノリで空とか飛び

てえなあ。

突然だが俺は今、二次ファンでワンピースの小説を書こうとしている。

あらすじはこんな感じ。

物語の主人公、ウインは「トリトリの実」モデル“鷹^{ホウ}？を食った鳥人間。

ウインはサイファーポールN0.9に入っていたが、ある時脱け出しお尋ね者になる。

そして海賊になるという話。

「六式^{ろくしき}」が使えて「トリトリの実」を食っているという。

見ての通り俺の夢を詰め込んだ感じの話だ。

あらすじ的なものは思いついたけど、

それから先が思いつかないんだよなあ。

この後どうすっかな………

「寝るか。」

そして俺はベッドに寝っころがり眠りについた。

夢の中

抽選会場のようだ。

ガラ ガラ ガラ ポロ

「おめでとう御座います。」

抽選結果は翼さんに決まりました。
貴方は常識的に考えたら普通は叶わない様な夢を一つ叶える権利を
得ました。

どうぞ有効にお使い下さい。」

俺は気付いた時にはこう答えていた。

「じゃあ、ウインになってみたい。」

「かしこまりました。」

乗った船は・・・

目が覚めると俺は知らない場所にいた。
少し揺れているから地震かと思っただら船の上のようだ。
それともう一つ俺の体はボロボロだった。

ガタン！！

後ろから人影。

「ん！？」

どすっ！！

「うっ！！」

しまった首に手刀を入れら

・・・ばたッ

「・・・」

その男は無言でウインを運んで行った。

数年後

え？早い？んなこと言ったら漫画だってそうだろうよ。
まア何があつたかは、お楽しみで。

俺は今、^{グランドライン}偉大なる航路航海？を航海している。と言つか迷子だ。
因みにもうどこまで行ってるのか知らないが原作は開始している。
まアだからこうやって海に出たんだけでも。
あつ重要な事を忘れてた、俺は今女だ。
目が覚めたら女になってた。
でもそのおかげで追われずに済んでいる。
名前もウインから前世？の名前、ツバサに変えた。

「で、どうするかな？」

この状況。

「ん？なんだ！急に暗く」

ガゴンっ！！！！

「うわアデカイ船？潰される！！」

バキっ！！！！

「うわアー！！」

海賊船の上に、この船の船長と思われる男が1人。

「フェツ フェツ フェツ。」

ガゴンっ！！！！

「ん？」

バキっ！！！！

「何だ？」

「うわァー!!」

「人の悲鳴？おまえ見てこい。」

「ウオ!!まかせとけ!!」

ザバーン!!

そう答えた魚人の男は海に跳び込んだ。

「ん、此処は？」

「フェツ フェツ フェツ 目覚めたか？
此処はフォクシー海賊団の船の上だ。」

「あんた誰？」

「おれの名はフォクシー!!この船の船長だ。」

「俺はツバサ、助けてくれてありがとう。」

「礼はいらねエ、お前おれの仲間にならねエk」「いやだ。」

ずー・・・ん

「・・・・・・・・・・そんなに即答しなくても・・・・・・・・」

「オヤビーン！！海賊船だ！！」

「ホントか！？ フェツ フェツ フェツ。」

そうするとフォクシーは出ていった。

「まさかフォクシーにお世話になるとは・・・」

しばらくして

ドン ドォーン！！

「始まったか。」

ツバサは窓から様子を確認する。

“キバガエル海賊団？？”と言うことはこの後ルフィ達と戦うんじゃない・・・

「よっしゃー！！ラッキー！！！！！！」

ガチャ

「お前見にいかないのか？試合始まるぞ。」

「おお、見に行く！！」

がや がや わー

「ホントにお祭り騒ぎだな。」

「おい其処の兄ちゃん、焼きそば食わねえか？」

「食べる食べる！！幾ら？」

言っ
てな
かつ
たけ
ど服
装は
男物
でさ
らし
巻い
てい
る。

ん！？

「あっあれ。」

ツバサの指指す先には・・・

「おお、海賊船じゃねえか。」

しかも麦わら海賊団の・・・

「フェッ フェッ フェッ、今日はゲーム三昧だな。」

デービーバックファイト 妻わらの一味

ドン ドォーン!!

「ゲームを」

ウオオオオオ!!

「受諾した~~~~ア!!」

あ、始まった。

「見に行くか。」

「さーて野郎共っ!! 騒いじやいやん!!」

わー わー

「敗戦における3か条?を今から宣誓するわよ!!」

長いので以下省略。

一回戦「ドーナツレース」

「レディ~~~~イ」

パアア・ン!!!

「ドーナツ!!!」

ドドドドドオン

うわっ始まったよ、お邪魔攻撃。
相変わらずせこいな。

数十分後

「勝者!!!!キューティワゴン号!!!!」

「デイビーバックファイト一回戦を制したのは!!!!
我らがアイドルポルチエちゃ~~~~ん!!!!」

やっぱノロノロビームせこいな、
なんか結果分かってても応援しちゃうね。

いやアゾロかつこいいい。

「男なら.....!!!!」

フンドシ絞めて、勝負を黙って見届ける!!!!」

だって男でも惚れちゃうね。て、いま俺女だった。

「ゲームを制したのはなんと・・・！！！！
麦わらのルフィ〜〜〜〜！！！！」

三回戦終了したな？
さて原作介入だア！！！！

「ルールだ、さア早エトコ選べ！！！！
誰が欲しいんだ！！！！」

「海賊旗をくれ！！！！」

「待って！！！！」

「ん？お前誰だ？」

「俺はツバサ、連れてってくれないか！！！！」

「いいぞ。」

「うおアッサリOKするのかよ！！！！」
確かにウソップ正しい。

「何か気に入った。」

「えーっ!!お前、おれの所には入らねエのk「うん。」

ずー…ん

「……………また即答……………」

「ぶ。ぶ。ぶ。」

「勝者!!“ 麦わらの一味?!!!!”

デービーバッククファイトこれにて閉会~~~~~!!!!”

わあああああああ!!

デービーバックファイト 麦わらの一味（後書き）

こんな入り方です。
すみません。

青キジ登場

「ーやっぱお前ら・・・
今死んどくか。」ドン！！

「！！！！？」

俺たちは今海軍本部“大将？青キジと向き合っている。

そうだった、もうエニエスロビー編じゃん。

ブチブチ！！

青キジは近くの草を抜くと、

ガキイ・・・ン！！！！

「“アイスサーベル？”

能力で氷の剣に変えた。

「命取る気はなかったが・・・」

「・・・！！！！」

青キジはロビンを切りつけようとするが、
それをゾロが受け止めた。

ギイイ・・・ン！！！！

「！！！！」

ばっ！！「スライス切肉？」

其処へサンジが、

「シュート？」

蹴りを加えサーベルを手から放させた。
そしてルフィが突っ込んで来る。

「ゴムゴムの？オ」

その時サンジとゾロが掴まれ、

！！？「ウ！！！！」 「ん！！！！」

「フレット銃弾？オ！！！！！！」

「冷た！！」

パキ パキ パキ・・・腕や足を凍らされてしまった。

「うわ！！」

「ぐあア！！！！」

「おおあああつ！！！！」

これが海軍本部“大将？の力か・・・
やっぱり生で見るとスゲエな。

がばっ！！！！

「ロビン！！危ねエぞ逃げるオ！！！！」

パキパキ・・

「ロビンちゃん！！！！！！！」

パキン！！

「・・・・・・・・！！！！！！」

「うわあああロビン！！！！！！」

ドンッ！其処には凍らされたロビンが・・

「お前エ〜っ！！！！！！！！」

「わめくな・・・ちゃんと解凍すりやまだ生きてる。

ただし・・・体は割れ易くなってるんで気をつけろ、割れりや死ぬ。

」

「例えばこういつ風に砕いちまうと・・・・「すう・・・

そう言いながら青キジは拳をふりかざす。

「ウウ！！！！やめろ！！！！！！」

「ロビン！！！！！！！！」

ブンッ！！！！ スカッ

「・・・・・・・・！！！！！！！！」

「ハア・・・あ・・・・・危ねエ！！！！」

間一髪でルフィがロビンを抱いて避けた。

ザッ・・・「！！！！」

安心していられるのもつかの間、青キジの足が迫る。

ばっ！！ぐしゃ！！！！

「ぐへ！！！！！！」

どどど「ギャーギャー！！！！」どどどど

間一髪で今度はウソップが抱き抱えて逃げ、代わりにルフィが踏まれた。

「……………！！」

「ウソップ！！！！チョッパー！！！！

そのまま船に走れ！！！！

手当てしてロビンを助ける！！！！」

「わ！！わかった」

「行くぞ！！」

「待って！！」

「何だよ今急いでるん　！？」

「俺に乗れ！！」

其処には鷹がいた。

「お前、能力者だったのか！？」

「そんな事はどうでもいい、早く乗れ！！」

「お！！おっっ！！！！！！」

「お陰さまで……」

「だいぶいいわ……ありがとう船医さん」

「そんな……嬉しくねーぞコノヤロー」

「嬉しそうだな。」

「そついやアロビン、ツバサが此処まで運んでくれたんだぜ。」

「そつだったの、ありがとうツバサさん。」

「そつだったのかア!!!」

「そついやアルフィ、コイツ能力者だったんだぜ!!」

「トリトリの実の？鳥人間!!!」

「そつだったのか!!!すんげエ!!!」

「まあね。」

「ロビンちゃん、何か……体のあつたまるもん作るうか!!
食欲はあるか?」

「……じゃあ

コーヒーを頂ける?」

「喜んで」

「ツバサちゃんもなんか食べるか?」

流石だな、サンジ俺のこと女だって気付いてるよ。

「別にいいよ。」

「ん？珍しいな、お前がナミとロビン以外にサービスするの。」

「うるせエマリモ、レディにはサービスするのが礼儀だ。」

「「「「え？ええええええ！？」」「」」」

「「「「女だったのか！！！！！！！！！！！」」「」」」

「うん。」

「みんな気がつかなかったのか？」

「「「「全然」」「」」」

「チョッパーも気付いてたの？」

「うんにおいで。」

バシヤ バシヤ バシヤ

「………んんん？？」

「何だありゃ………」

ゾロが何か見付けたみたいだ。

「ん？」

「カエルだ！！巨大カエルだ・・・！！！！」

青キジ登場（後書き）

丸写しみたいになってしまった。

介入するのが難しい。

しばらくこんなが続くかも。

キャラクター紹介（前書き）

1日3000PV驚きです

キャラクター紹介

翼つばさ

身長169cm

この物語の主人公。

自分の書こうとしていた小説の世界の主人公になってしまった。
原作知識はエニエスロビーまで。

ウイン(男)

身長186cm

ツバサ(女)

身長172cm

主人公の書こうとしていた小説の主人公。

元CP9の「六式」ろくしき使いで、

「トリトリの実」モデル“鷹”ホークを食べた鳥人間。

CP9から脱け出し逃走していた。

命からがら逃げて乗った船で気を失ってしまった。

目が覚め起きて見ると自分は女になっていた。

それを逆手にとり名前をウインからツバサに変え生活する。

“水の都？ウォーターセブン”

「カエルだ！！！巨大カエルだ・・・！！！！」

「クロールで海を渡ってるぞ！！！！」

「あんなに急いでどこ行くんだ！！？」

「追うぞ野郎共！！！！」

カエルが向かって行ったのは、

「ん？あれは・・・灯台・・・！！？」

シフト駅ステーション

建物から女の子が出て来た。

「あ！！」

大変だ！！ばーちゃんばーちゃん海賊だよ！！！！」

今度はおばあさんとウサギ？が出て来た。

「何！！？本当かチムニー！！！！」

よーひちよつと待つてりゃ。」

おばあさんは電伝虫を持って来た。

「あー・・・！！もひもひ！！？」

え〜と！！・・・！！何らっけ！？

忘れまひた！！！！ウイ〜ッ！！！！」

「酔っぱらいかよっ！！！！」

酔っぱらいのおばあさんココロさんの話によると此処は海列車のシ
フト駅で、ステーション

ココロさんはこの駅長をしてるらしい。

この先にあるウォーターセブンには世界最高の船大工達がいるらしい。

「……よし決めた！！！！」

そこ行つて必ず“船大工？”を仲間にするぞ！！！！”どん！！！！

「ほいじゃあコレな！！！！」

簡単な島の地図と“紹介状？”

「じゃ行くわ！！！！」

色々教えてくれてありがとうココロさん、チムニー！！！！」

ルフィ達は、新たな仲間を引き込むべく、

“水の都？ウォーターセブンを目指す。”

「おいアレじゃねエのか？」

「島だっつ！！！！島が見えたぞっつ！！！！」

「うおー!」

「素敵。」

「うおおっ!」

どーん!!

「何だこりゃ〜!」
「でっつけ〜噴水だ!」
「はーっ!」

「うは〜!」
「こりゃすげー。」

まさに産業都市!」

「港はどこかしら……。」

「あ、俺知ってるよ。」

「ツバサ知ってるの!」

「」
「」
「」
「」
「」

「悪い悪い。」

「あ、俺ら海賊だから裏町の岬のほうがいいかも。」

「ありがとう助かったわ。」

「ツバサは此処に来た事があるの?」

「うん、てか住んだ。」

「へえー。」

あ、言い忘れてたけど、この体の記憶はあるよ。
それと翼^{おれ}自身の持つてる原作知識はエニエスロビー編までしかない。
その後はあまり知らない。

「よし!!ほんじゃ行ってきます!!」
「ぴう!!」

「待つてルファイ!!ウソツプ!!
あんた達私についてきてよ!!」

「どこに?」

「まずはココロさんの紹介状を持って“アイスバーグ?”という人を探すの、
ツバサも来てくれる?」

「ん?いいよ。」

「よし!!じゃあまアとにかく!!行こう“水の都?!!”
ん!!」

「……んん?ここだけ?町への入り口。」

「貸しブル屋??何だ?」

じーっ!!

急に俺の方を見てくる3人。

「えっ!?俺!?

あつ“貸しブル屋?っていうのは、ブルを貸してくれるとこで、ブルって言うのは海の馬みたいなもんで、

ここは水路が多いから住人にとっちゃかかせない乗り物なんだ。」

「くくへえー。」「」

「じゃあ俺達も借りようぜ!」

「そうね。」

「すみません、ブル貸してください!」

「いらっしやいブルだね?何人だい?」

「4人!!」

「4人なら“ヤガラ?2匹でいいね。」

「荷物乗っけるから3匹のほうがいいんじゃないか?」

「ん?いいよ俺飛ぶから。」

「そっかじゃ2匹で。」

ザザアーツ!!!

「うおう!!!よし行けヤガラ!!!」

「ニーツ!!!」

今俺達は黄金を換金して造船所に着た。

「はつきり言うがお前達の船は、
わしらの腕でももう直せん……!!!」

「メリー号が直せねエって!!!?何でだ!!!」

ん!?!あれ?ウソツプがない、フランキー一家かな?

ん？話が一段落着いたようだ。

「ん？」

ルフィが何か気付いたようだ。

「何？」

「軽い……」

そういつてトランクを持ち上げる

「？ どうして？」

冗談やめてよ！！大金が入ってて軽い訳が……」

「「ギャ~~~~ツ！！！！」」

「2億Bペレないっ！！！！」

「ウソツプもないよ！！！！」

フランキー一家の作業なんじゃ！！！！」

「ルフィ急いで探すのよ！！！！」

「おおー！！！！」

ダーーーツ！！！！

「ねエ！！フランキー一家ってアジトはどこ！！！！？」

ナミはパウリーに聞いた。

「お前らが船停めてるっていう、

“岩場の岬？からずっと北東へ行った海岸にある「フランキーハウ

ス」だ。」

「ありがとう！……行こうナミ！」

ざわざわ

「！ 人集り……」

「あれウソップじゃない!？」

「え……
ウソップ!!!」

人集りの中に倒れていたのはウソップだった。

「ウソップ!! やったのはフランキー一家なの!？
あいつら!!!？」

「そつだ……俺が弱エもんで……!!!!」

「俺、皆に知らせてくる。」

「お願い!!」

バサッ

ツバサは鷹になり飛び立った。

ゴインク・メリー
G・M号

「みんなー!!」

ゴインク・メリー
G・M号にむかってツバサが走って来る。

「あれれ!? ツバサが帰って来たぞ!!」

「ツバサちゃん何かあったのか?!?!?」

「みんな!!! 大変なんだ!!!
ウソツプが!!!」

水路

ツバサ達はウソップが倒れていた場所にきた。

「あれっ？ウソップがいない！！」

「場所が違エんじゃねエか？」

「うるせエよマリモ！！」

「いやここのはず！！」

「見て血だ。」

チヨッパーが血の跡を発見した。

「勝手に移動したのかも。」

ああああああ「？」

空から何か降ってくる。

「あああああああ」ガン！！
ポチャン！！

「ルファイ！！？」

「何やってんだてめエ！！」

「あ！！そつだお前ら大変なんだウソップが。」

「知ってるよ！！！！来い！！」

「今そのアジトへ向かう所だ。」

「早く行こう!」

“水の都？ウォーターセブン（後書き）”

感想待ってます

フランキー登場

フランキーハウス前

「ちょっと待ってるよ、ウソップ」

パキパキ!!

「あのフザけた家吹き飛ばして来るからよ……!!!!」ドン
今俺達は、また返り討ちにされてしまったウソップの仇を取りに来
た。

「パーティーテーブルキックコース?!?!!!」

ドガガガガ!!

「ギャー!!!!」

わああああああああ

「やべエ!!!!」

ちよっとコイツらまじでヤベエぞ!!!!!!」

「放て砲弾！！！！！」

「……紙^{カミ}絵^エ？（ボソ）」ヒラリ

すう……ドガンー！！！！

「何だ！？当たんねエぞ！！！？」

「残像斬り？！！！！！」

指銃^{シガン}を使うとややこしいからやめておく。

「消えた！！？ぐああ！！！」

わあああああ

俺らの攻撃によりフランキー一家はどんどん蹴散らされていく。

パキ……パキ……

「お前ら骨も残らねエと思え。」ドドンッ！！

あの後、ウソップは目を覚ましたけど、
原作通りメリーのことと決闘して一味から抜けた。

裏町の宿屋 屋上

「アイズのおっさんが……!!?」
ルフィが聞くと

「ええ撃たれて今意識不明だって……!!」
ナミがそう答えた。

そうかも暗殺未遂の事件かあ

「ちょっと行ってみる」

そういとルフィは乗っていた建物の屋根から飛び降りた。

「待つてルフィ、私も行くから。」

「俺も行くよ。」

1番ドック

「……すごい人望……
近づけそうにないわね。」

ズン ズン ズズズ
ン

「？」

急に音楽が流れ始めた。

「出たー！！！！」

「この島から出ていけー！！」

「しばり首だー！！！！」

すごいブーイングの嵐の中、建物の屋根の上に現れたのは、アロハシャツに海水パンツ一丁の変態。

「そつだ、おれは人呼んでワアオ！！！！」

「んーっ！！！！フランキーっ！！！！！！」ドドオーン！！！！

「出て来い“ 麦わらア？！！！！！！”

「・・・・・・・・何だあの変態・・・・・・・・」

「・・・・・・・・！！」

フランキーって・・・・言わなかった！！！！？」

「・・・・・・・・！！！！？」

あいつが・・・・・・・・！！！！！！」

「おい！！！！」「ルファイ！！」

ルファイがフランキーに向かって叫ぶ。

「？」

「海水パンツ！！！」

「あん！！？」ギロ・・・

ザワ・・・

「おれがルフィだ。」ドン！！！！

「お前かア・・・」麦わらのルフィ？つてのア。

人の留守中に、えらく大暴れしてくれたじゃないの、お兄ちゃん・・・！！！！」ゴオオオオオオオ

「ナミ、ルフィが喧嘩始めると思うからここから離れよう。」

「そうね。」

ツバサはナミを乗せてその場を離れた。

「“ストロング右^{ライト}？！！！！”
ポウン！！！！」

「！！！！？」

フランキーのパンチが、
肘から下のちよつと真ん中らへんから外れ、
鎖が伸びて飛んだ。

ドゴン!!!

そのパンチは見事命中し、ルフィを吹き飛ばした。

「何!?!」

驚くナミ、それにしてもすごいな“改造人間?”。

ジャララ・・・

伸びたフランキーの腕が戻っていく。ガシン・・・

ボコ・・・ どさっ!!!

「ルフィ!!!」

「何今の!!!」

「腕が外れた。」

「……………あア、知らなかったのかい……………お姉ちゃん達。」

右腕を左手で伸ばしながら話す。

「じゃあ教えとこうか……………」

おれは“改造人間?だ!!!”ドン!!!

襲撃犯

1番ドック

フランキーとルフィのケンカをしている所に、
ガレーラカンパニーが割り込んで来た。

「くだらねエマネしてくれたな。」

「？」

「身に覚えがあるだろう・・・!?
よくまたここへ顔を出せたもんだ。」
パウリーが聞いてくる。

「・・・・・・何で？」

俺たちおっさんのニュース聞いて・・・」

「とぼけるんなら・・・・・・
締めあげるまでだっ！！！！」ばっ！！

シユルルルル！！！！ 「うわっ！！！！」

ロープアクション

「R・A “ハーフノット？！！！！”」

袖から出てきたロープはルフィの首に巻き付いた。

「ウエエッ！！！！苦しい・・・苦・・・！！！！！！！！」

「 “エア・ドライブ？！！！！”」

投げ飛ばされるルフィ。

「ぶへ！！！！」ドゴオン！！

「やつちまえー！！ガレールカンパニー！！！！」

わああああああ

「社員最強の5人のケンカだっ！！！！」

わー わー

「え？？何で？？何で船大工もみんな敵なの！？」

ザザアツ ドダウン

「何か誤解されてるのかも。」

ガ ガ ガ ガシャン！！

ボコオン！！

「くそオー！！」

何なんだ理由くらい言えエ！！！！」

「理由を知りてエのは俺たちの方だ・・・！！！！」

「昨夜 本社に侵入して、

アイスバーグさんを襲撃した犯人はお前らだろうが！！！！！！」

「？ 何それ。」

「ばか言え何で俺達がそんな事するんだ！！！！」

怒鳴るルフィ。

「犯人？を二人憶えているとアイスバーグさんが証言したんだ。

政府に聞きゃあお前らの仲間だと言っじゃねエか・・・

“ニコ・ロビン？って賞金首はよ！！！！”

「捕まえるオ!!!暗殺者共を逃がすなア!!!」

「やめてよ!!!」

放してつてば、私達が何したつていうのよ

「とぼけるな、暗殺者の一味め!!!」

よくもアイスバーグさんを撃ちやがったな!!!
逃がさんぞ!!!」

「ナミ!!!」がしつ!!!「あつ!!!」

ツバサはナミを助けようとしたが捕まってしまった。

「くそお!!!」

おい!!!やめろお前らア!!!

おれ達はなんもしてねエ」

「いつまでも言いはってるがいい。

観念しろ、海賊。」

「ぶつ潰せ!!!ガレーラカンパニー!!!」

わああああ

「いえーい!!!」

アツハツハツハツハツハ!!!」

ちやぶだいでお茶を飲んでいるのはフランキーだ。

「気分爽快だわいな！」

「そうそうあんな奴ア吹き飛ばしちまえばいいんだ！！
さすがはおれ達の誇り！！！」

“ガレーラカンパニー？！！！！”

「いやいやいや、

しかしお前、その麦わらのチビは、

我がフランキー一家の憎つき仇だよ！

まずこのケンカの先客はおれだったんだよ！

そこへきてお前ら、

おれの獲物を横取りする様なマネをすんなと……………」

「何度言わすんじゃクラアア！！！！！」

おんどりやああ！！！！ガシャアーン！！

そう言つてちやぶだいを投げ飛ばした。

「コネクターセット……………」ガチツ ガチツ

「これでさっき巨大クレーンを倒したんだ！！！！」

「クレーンを……………？大砲か？」

「「やっちまえだわいなアニキ……………！！！！」

ブオオ……………！！！！」「なアに砲弾なんざ飛ばさねエよ
飛んでくのは……………“空気の弾”

ただし……………速度は風の領域を越える。」

「空気？」

「危険だ逃げる~~~~~!!!!」

ぶくっ!! ギリ・ギリ・

「アア~~~~~っ!!!!」

「クー・ド・ヴァン風来砲?!!!!!!」

「!!!??」

ベコオン!!!!

「うああ~~~~っ!!!!」

吹き飛ばされる職人達。

「痛・・・っ!!!!」

何だ!!?」

“風圧?に・・・激突されたみてエな・・・!!!!ハア・・・ハア」
ガラ・・・

「作りかけのガレオンごと・・・!!」

1番ドックが崩壊したア~~~~っ!!!!!!」

「ナミ、ツバサ!!!走れ!!」

何とかしてアイスのおっさんとこ行こう!!!!」

「おいみる!!」
“麦わら?が逃げるぞ!!!!!!」

がしー!!「しっかり捕まってるー!!」
ぴょーん

「本気でいくの!?!」

「あたり前だアイスのおっさんが、
何でロビンを犯人だと言ったのか直接聞いてくる。」

「慎重に行けよ。俺らは追われる身だ。」

「じゃ行つて来る。」ぐいーん

「え……ちよっ……!!!!!!」

バリィン!!!!!!「!!!!!!?」
ルフィは窓から突っ込んで行った。

「あのバカ!!!!」

ナミ、俺様子見て来る!!!!」

「お願い!!!!」

バサア!!!!!!

アイスバーグの寝室

「昨夜 おれはニコ・ロビンをこの目で見た……！！
彼女はお前の仲間……それが事実だ。」

「それは本当にロビンだったのか？」

ガチャ

「誰だ！！？」

「驚かせてすいません。ツバサと言います。」

「海賊小僧の仲間か？」

「はい。」

「何の用だ？」

「貴方を殺そうとしたのは、
俺達じゃありません。」

「そんな事か・・・口を開くな、お前の言葉にやあ、もう力はない。」
「力チヤ・・・」
「そう言つて銃を構えた。」

「貴方を襲つたのは、シービーナイン“CP9”です。」

「それは噂だろう。シービーナイン“CP9”なんてものは存在しない。」

「いいえ、噂ではありません。」

「何を根拠に・・・。」

「何故なら俺は・・・元シービーナイン“CP9”だからです。」

「なんだと!?!?」

「何だ?そのCPなんたらつてのは。」
「ルフィが聞いてくる。」

「サイファーポール9?ナイン」

“正義?の名の元に政府対して非協力的な「市民」への・・・
「殺し」を許可されている、特別な9つ目の機関。」

「正義と名のつく殺しがあつてたまるか!?!」

「奴らはきつと貴方の持つている“設計図”を狙っている。」

「何故それを知っている!?!?」

「言つたでしょう俺は元シービーナイン“CP9”だつて。」

「元“CP9”？何だったら誰が犯人なのか分かるんだろう？
それとニコ・ロビンについてはどう言いわけする？」

「それを知って本人達の前で平然としていられますか？
それとロビンについてですがそれは何とも・・・
今、彼女は何処にいるのか、わかんないんです」

「・・・」

「じゃあこれで俺らは行きます。
俺らが出たら壁をその銃で撃ってください。
その方が誤魔化し易いです。
ルフィ行くよ！！！」

カチャ

バサア

「何の話だったんだ？全く分かんなかった。」

「ゴメン後で話すよ。あ、おーいナミィー！！！！」

「あんた達話長すぎ。」

「捕まったんじゃないかと心配したのよ！！！！」

「「ゴメン。」」

「みんなを探そう、

何を聞いたかは後で話すよ。」

襲撃犯（後書き）

文才がア！！！！

作戦開始

『事態はもつと悪化する。』

今日限りでもう……あなた達と会うことはないわ。』

「……ロビンは、

確かにそう言ったんだなチョッパ！」

ゾロが聞いた。

「うん。」

「今日限りでもう会う事はねエってんだから、

今日中に何かまた、事態を悪化させるような事を、

するって宣言してる様にも聞こえる。事態を更に悪化させられるとすれば……

その方法は一つだ……」

「今度こそ“市長暗殺”？」

「事が起こるとすりゃ今夜だ。

“現場？へは？”

「行く」

「行くのは構わないけど……問題があるのよね。」

サンジくんはロビンが誰かと歩いてるのを見たと言ってたでしょ、アイスバーグさんも・同じ証言をしてるの“仮面を被った誰か？”って。

急にロビンを豹変したのはそいつが原因なのよ!!」

「みんなちよつといいか？」

「何？」

「実を言つとおれ……5年前まで政府の人間だったんだ。」

「え!？」

「サイファーポール？世界に8つの拠点を持つ政府の優れた諜報機関。」

俺はその内のあるはずのない9つ目のサイファーポールにいたんだ。」

「あるはずのない9つ目の……」

「アイスのおっさんにも言ってたやつか。」

「5年前、俺達の所へ任務が来た。」

ガレーラカンパニーへの潜入調査だ。」

アイスバーグさんは“ある物？の設計図を持っていた、それを奪うためにだ。”

その時、任務のメンバーに指名されたのが……おれとルツ

チ、カク、カリファ、ブルーノの5人・・・」

「もしかしてそれがこの事件の犯人？」

しかもカクってウソツプに似ている奴じゃ・・・」

「アイスのおっさんに教えに行くぞ!!」

「待つて!! 教えたらアイスバーグさんは確実に殺される、それに信じて貰えないと思う。」

「ツバサの言う通りだ、ヘタに動かないほうがいい。」

「奴らが動いたらおれ達も動こう。」

「分かった。」

じゃあ、行こう。」

本社前の木の上

ビュオオオオオ・・・がさっ

「ちよつと遠いぞ!」

「腕伸ばして飛んでけばいいでしょ!!
騒ぎが起こってからね。」

「そうだなこつちが先に騒ぎを起こしちゃ、それを利用されるだけだ。」

「すごい数の護衛だ・・・(汗)

みんな武器持ってて強そうだぞ!!」

双眼鏡を覗いて様子を見るチヨツパー。

「・・・それやそうでしょ。」

海賊だつてねじ伏せちゃうのよ、

ここの船大工達は。」

「何か動きがあつたら、すぐ教えるよ。」

つてツバサ!? お前何服脱いでんだ!？」

「何つて、ちよつと見てくるだけだよ?

服着てる鳥なんておかしいだろ?

それにさらし巻いてるからいいじゃん。」

「そういう問題じゃねエ!!!」

「あ、ズボンも脱がないと変かな?」

ぼかつ!!

「痛エー。」

「あんたは女なんだから、

少しは恥ずかしがりなさい。」

カチャ

「これ着ければ飼われてる鳥に見えるんじゃない?」

そういつて俺に首輪を付けてくれた。

「ありがとう。じゃ見てくる!!!」

バサッ

ビュウウウウウ

バサッバサッ

さてと・・・アイスバーグさんはどこかな？

ドォン！！！！

！？始まったか・・・

CP9の強さ(前書き)

サブタイ思いつきません。

バサッバサッ

「あれっ！？いない！！」

さっきまでルフィ達のいた所へ戻って来ると誰もいなかった。

「先 رفتか・・・」

ドカァン！！！！

「ん！？あそこか！？」

窓を覗くとアイスバーグさんとパウリーが倒れていた。

「だいぶ進んじまってんな。突っ込むか・・・」

ビュー!! ドカァン!!

「!?!」

「ツバサ!?!」

「仲間か・・・」

「ロビン!?!」

何で勝手にいなくなるんだ!?!!!」

まあ理由は知ってるんだけど
ね・・・

「・・・あなたまで。」

私の願いを叶える為よ!?!!!

あなた達と一緒にいても決して叶わない願いを!?!!!

・・・それを成し遂げる為ならば私は、

どんな犠牲もいとわない!?!!!」

「悪いがそこまでにして貰おう・・・」

我々はこれから重要人物を探さなきゃならないんだ、急いでる。カリファあとどれくらいだ？」

「……あと2分よ」

「突然だが……あと2分で、

この屋敷は炎に包まれる事になっている。

……君達も焼け死にたくなければ、速やかに屋敷を出る事だ。

まアもちろん……

それができればの話だが。」

ヒュッ！！

ドゴオン！！！！

「ルファイ！！ゾロ！！！！

何なの……！！！！？

あいつらの強さ……！！！！」

ルファイ達は「六式」の前に軽く捻られてしまった。

「……環境が違う……！！

我々「CP9」は物心ついた頃より、

政府の為に命を使う覚悟と、

“人体の限界？を超える為の訓練を受けてきた……

そして得た力が6つの超人的体技「六式^{ろくしき}」。

よく身にしみたハズだ。

世界政府の重要任務を任される我々4人と……

たかだか一海賊団のお前達との、

ケタ違いの戦闘力の差が……！！！！
最後に……

面白いものを見せようか……」

「……………！！？」

え……………！！？？」

「？」

うわああああ！！！！」

「“ネコネコの実？……

モデル“豹？”」
レオバルド

「……………！！！」

“ヒョウ人間？か……” 「でけエ。」

「ルツチ、職人達が上がってくるわ！！」

「……………なアに来れやしない……

「嵐脚」「ビュツ！！」

ドゴゴゴゴォーン！！！！

斬撃が飛び部屋の壁を斬り裂いた。

「壁から離れろ！！チョッパー！！ナミ！！！！」 「わ！！！！」バキ
バキ

ダダッ！！ いきなりパウリーがアイスバーグに向かって走り出した。

「あなたを必ずここから連れ出す!!!」
「無理だ、お前そのキズで……!!!」
「どうやって!!!」

「おやめなさい、パウリー。」
カリファーが言った。

「ハアー
……おれは少なくとも……!!!
今までお前らを本当に“仲間?だと思つてた!!!”

「……お前だけだ……」ギラッ
ルッチは左手を構えた
「!!!」

「ハトのやつ~~~~!!!」ドカーン!!!「!!!」
ルフィはルッチを殴った。が、

「麦わら!!!」
ギラ……「指銃^{シガン}」。
ド キ ユ ン!!!ズボッ!!!

ルッチの指はルフィの体を買いた。
「……!!!」

ウ……オ……」

「ルフィ!!!」

ガッ!!!

「島の外まで……飛べ!!!」
ボ コ オ ン!!!

ルフィは壁をつき抜けて飛んで行った。

「うわぁ~~~~」

「……」

「ルフィ!!!!」

「ルフィ~~~~!!!!」

ナミが叫ぶ。

「てめエ!!!!」 「テツカイ鉄塊」。

ギイン!!!!「!!!!」

ゾロが斬りかかるが鉄塊で守られてしまった。

シュツ ドゴオン!!!!「ぐハ!!!!」

「ゾロ!!!!」 「バコオン!!!!」

「お前もだ……」

ゾロもまた、屋根をつき抜け飛んで行った。

「おい!!!女が一人上階から落ちてきたぞ!!!」

そこにはナミが倒れていた。

「こいつは!!!!」 「麦わら?の仲間だ!!!」

「間違いねエっ!!!!」

捕まえて仲間の居場所を吐かせよう。」

職人達は必死の消化作業をしていた。

「ダメだ、風に負けちまう!!」

「全然火が消えねエぞ!!」

「まだ中に誰かいたら・・・!!」

「これじゃもう助からねエ!!」

その時、

「え!!?」バリイン!!!

窓を突き破って何か出てきた。

出てきたのは・・・

ズダン!!

「鳥とトナカイ!!??」

「アイスバーグさんと・・・!!
パウリーさんを背負ってるぞ!!」

「ハア・・・ハア・・・」ヨロ・・・

(ナミ・・・!!)

大変だ・・・治療して・・・やんなきゃ・・・

フラ・・・「!」ドサ・・・

「!?!」

急いで人型になって近づく。

「チヨツ・・・」駄目だ俺も体が・・・

ドサ・・・

「能力者だ……！」

「す……！！！！すぐに手当てを」

「すごい火傷だ……！！」

「おい……！！コイツらどうする？」

「そいつらもだ……！！命の恩人だぞ……！！」

“ロケットマン”？出航（前書き）

150000PVです…!!

ありがとうございます…!!

“ ロケットマン？出航

『……………じゃあお前の“願い？つてのは……………!!!!”』

『「私を除く麦わらの一味の7人が、無事にこの島を出航する事。」』

『その為なら兵器も呼び起こし、世界がどうなるかと構わねエつてのか!!!?’』

『構わない。』

「おれは引き鉄を引けなかった。事もあるうちに、全世界に生きる全ての人間の命より、あの女はお前達7人の命を選んだ。」
私達の為……………!!!」

「よかった……………ロビンはじゃあ……………私達を裏切ったんじゃないんだ……………!!!!」

その後、職人達にも協力してもらって駅に向かうも、
“海列車？は出港した後だった。”

しかしルフィとゾロは見つかり、

船を貸して欲しいと船大工達に頼むが断られてしまった。

その時、ココロさんが・・・

「死ぬ覚悟があるんなら・・・

ついてきな、出してやるよ“海列車”？」「ドン！！

「さア海賊共、ふり落とされるんじゃないよ！！！！」

シュツシュツ シュツシュツ

「ウォーターセブン発エニエス・ロビー行き、

“暴走海列車”「ロケットトマン」！！！！」

「よし！！！！出航！！！！

行くぞオ！！！！全部奪い返しに！！！！！！」

ポッポ~~~~！！！！

麦わらの一味とガレーラの職長3人とフランキー一家を乗せロケットトマンは出航した。

「フランキー一家とも、
ガレーラの船大工達とも、
町じゃゴタゴタあったけど、
この先はここにいる全員の敵は同じだ!!」

このシーンのルフィカッコいいよなア、
しかもそれを生で見れるなんて・・・
ってんな場合か!!

「ーせつかく同じ方向むいてるもんが、
バラバラに戦っちゃ意味がねエ、
いいか、おれ達は同志だ!!!!」
ガシッ!!

「先に出た“海列車”には、
おれ達の仲間も乗り込んでる!!!!
戦力はまだ上がる!!!!
大波なんかにはやられんな!!!!
全員目的を果たすんだ!!!!
行くぞオッ!!!!!!」

「ウオオオオーッ!!!!」

ブルルルル・・・」

「ナミ、どうしたの?」

「鳴った、子電伝虫。」

『ナミさんナミさん聞こえるか!?!』

「うん!!サンジ君ね!?!」「えっ?サンジ?」

『ん?ツバサちゃんもいるのか。』

こちら、ちょっとアホ二人のせいで、
マズイ事になってきた。
そっちは随分賑やかだな。』

アクア・ラグナ
「高潮だよ。」

『なるほど。』

「もしもしサンジ君!!?」

ロビンの行動の理由と、

私達の今の状況を全て話すからよく聞いて!!」

ナミはあつた事などを全て話した。

「ぶは、面白かった。」

ん、戻って来たか。

「ルフィ!!こっち来て!!」

「ん?」

「サンジ君!!」

『おう、ルフィか!!』

「サンジっ!!」

そっちどうだ!?!?ロビンは!?!?」

『ロビンちゃんは、

・・・まだ捕まっただまだ。
ナミさんから今事情を聞いたところ。
・・・全部聞いた・・・」

「・・・そうか、
いいぞ暴れても!」

「ルフィ!!無茶いな!!
おれ達が追いつくまで待たせろ!!
おいコック聞こえるか!!
その列車にはヤベエ奴らが「いってゾロ!!
お前ならどうした。」「!」
「止めたってムダだ。」

「・・・わかってなア。
おうマリモ君、
おれを心配してくれんのかい?」「するかバカ(怒)」

「だが残念、
そんなロビンちゃんの気持ちを聞かされちゃあ・・・
たとえ船長命令でも
おれは止まる気はねえんで!!」『ドン!!
バキッ・・・!!』サンジは電伝虫を握り潰した。

“ ロケットマン？出航（後書き）

丸写しに近い気が・・・！！！！

感想、質問あれば下さい！！

待ってます！！

“ エニエス・ロビー？到着（前書き）

20000PV突破ありがとうございます！！

「あの人作戦全然わかってねえ〜っ！！！！」

「無駄だった」

ナミが肩を落とす。

「『わかった』って言ったよな。」

「5分“待つ”とかムリだから。」

「そりゃそうか。」

「んががが、気の早エ奴らね。」

「いけー！！海賊兄ちゃん！！」

「遅れをとるなソドム！！ゴモラア！！！！」

「バヒヒヒ〜ン！！！！」

フランキー一家達も突入して行った。

「さてと、俺達は気長に4分待つとするか。」

「ツバサ、思ったんだけど。」

ナミが思い出したように話しかけてきた。

「何？」

「その服動きにくくない？」

「え？まア確かに・・・」

ん？ナミその手は何？」

ナミが怪しく指を動かしながら近付いてきた。

「決まってるじゃない。」ニコッ

「え？やめ！！うわああああああ！！！！！！」

「ハア、疲れた。」

着替えさせられましたよ。

露出度の高い服に…………上だけ。

谷間が見えるウ！！！！

下だけは必死に頼んでジーパンにしてもらった。

「ツバサちゃんビュ〜ティフォ〜！！」

気持ちわるっ！！普通にしたらカッコいいのにな。

「ヘエーあなたスタイル良かったのね、

いつもあんな男物の服しか着ないから勿体ないわ。

そうだ！！！！」

そう言うとナミは俺の服を掴み……

「え…………ボチャン

「俺の服…………」

捨てた…………海に……

「何してくれとるんじゃないア！！！！」

「んなことしてる場合か？」

ゾロが呆れた様子で言ってきた。

「あ、すいません。」

「おれは作戦通り外行ってくる。」

『「さア5分たったよ。」

ポチポチいこうかね……………』

「おいはあさん!!!」

前の方からゾロの声がする。

「ん!?何らい!!!」

「

『おめエら作戦変更だそうらよ!!!」

全員車両にしっかりとしがみつけと言ってるよ!!!』

「おうアホ剣士!!!何かあったか!!!?」

「「正門」を閉められた!!!」

「何だとオ!!!?」

「大変だー門にぶつかるぞー!!!」

「心配無用…………道はある!!!」

柵をつっぱれカエル!!!」

「ゲロオ!!!」

ドガシャアン!!!グニャ…………!!!

曲がった柵に乗り上げ海列車は…………

「海列車?が…………!!!」

「飛んだアア〜!!!」

「死ぬーっ!!!」

「ナミさん早くおれの胸の中へ!!!」

「ゾロ、あんた着地の事、

考えてあるんでしょうね!!!?」

「任せろ!!!」「ゲロ」「運に。」

「運任せかー!!!」

「おれ死にたくないから出るわ。じゃがしっ!!!」

「逃がすか!!!」

鳥になって窓から出ようとすると足を掴まれた。

「前に巨人ーっ!!!?ぶつかるーっ!!!」

「ウソッあいやそげキングうるせえよ。」

「ツバサひどっ!!!てうわああああ!!!」

ズド オン!!!

「どへーっ!!!」

巨人が唸なり声をあげる。

ロケットマンはもろ巨人にぶつかり落ちた。

「あいたたたた。ん?」

辺りを見回してみるとナミが攻撃の準備をしていた。

「サンダーボルトテンポ?!?!」

バリバリッ!!ドカアアン!!!

「ぎゃあああああ!!!!」

「————って無差別かーっ!!」

ガン!!「いでー!」

「そげキンググー!!!!」

ナミが何故かそげキングにつっこんだ。

「うわ、すげー迫力!!」

「てめエナミ!!!!何してくれてんだ!!!!」

「んナミさん、おれは今君に出会った衝撃を思い出したよ!!!!」

“サンダーボルトテンポ?はゾ口達にも当たっていたようだ。

「——ところで、先突っ走ってった、

あ…アホはどこにいるんだ?」

「さア、この島も狭くはないから、

探すとなると……」

ボカア……ン!!

向こうに見える建物が崩れる。

「……」「絶対あそこだ!!!!」「……」

「それじゃ……追いかけるか。」

「待て!!!!こっちへ乗れエ!!!!」

「バヒヒヒ……ン!!!!」

フランキー一家の巨大ブル“キングブル?が走って来た。

「助かったーっ!!」

俺達は“キングブル?に乗りこんだ。

“ 宣戦布告？（前書き）

ユニーク40000人突破ありがとうございます！！

“ 宣戦布告？ ”

『 エニエス・ロビー本島全部隊へ！！！！
海賊達が「裁判所」前広場へ到達した！！
全兵直ちに「裁判所」前広場へ！！！！！！』

俺達は“キングブル？やパウリー達の活躍で、
ついにルフィのいる「裁判所」の前まで来た。

「 艶美魔？^{えんびま}」ユラリ・・・ユラリ・・・

「 なんだ！！？刀が曲がって見える。」

「 “夜不眠^{よねずみ}？ ”

“ 鬼^{おに}？ “斬^きり？！！！！” “どん！！”

「 ぎゃあああ。」

ダッ！！

「 さア行くぞ、道があいた。」

「 うん」

「 うおおおおおおお！！

待て待て待てエ！！！！

そこを退かんかトナカイにバカ剣士！！」

ドヒュン！！！！ド ドド ドド ド

「 この危険な敵陣！！

ナミさんとツバサちゃんの進む道は、

このおれが切り開くのだ！！！！どけい！！！！」 おらアああ

サンジがゾロに蹴りかかった。

ガキーン！！「うわ！！危ねエてめエヤんのかコラ！！！！」 (怒) 「

「ええ!!!? 何でケンカ始めてんだ!!!?」

「ナミさん、ツバサちゃんこっちだ!!!」

おれにのみついてきな!!!」

「あのね、私達ロビンを助けに来たんでしょ!?!」

「おお・・・そうだロビンちゃんが・・・!!!」

おれの助けを待ってるんだ!!!」

今頃寂しくて泣いてやしねエかな。」

ついて来いとか言ってたのに、

先に行っちゃったよあの人。

「ん? あー!ー!ー!」

目を離れたスキにゾロが!!!」

チョッパーの見える方向を見ると、

ゾロが反対方向にむかい走っていた。

「階段つて言ったのに、

どう間違ったらそっち行くのよ!!!」

「俺連れ戻しに行くよ。」バサツ

それを見ていたフランキー一家達。

「アニキは助かるんだろうか。」

「やる時ややるタイプなのさあいつら。

きつと。」

「もう・・・!!」

「有罪、有罪。」ジャラ・・・

「何なのよ一体こいつら!!!!」

俺達の目の前には鎖つきの鉄球を持った“陪審員?”がいた。

「ストーカーじゃない?」

こいつらの格好キモ過ぎ。

トゲ付きのブリーフみたいなの履きやがって。

「有罪!!有罪!!」

「行くわよ!!チヨッパァ!!ツバサ!!!!

間違えた!!行くのよ!!チヨッパァ。」

「あっおれ一人!!?」

「私達/俺ら女だもん。」

「龍?」「!!!!?」「巻き?!!!!!!」

ズバァン!!!

「え!!!?」

「オオ……!!!」

いきなり床が崩れ、目の前の“陪審員?”が倒れた。

「ちよつとこの床も危ねエ!!!」

「何なの!?下に何かいるの!!!?」

「ゾロじゃない?」バサツバサツ

「ズルっ一人だけ飛んでる!!!」

「しょうがねエ」生命帰還「解除。

ほら掴まれ!!!」

がしっ!!!「うわツバサが大きくなった!!!」

ボツカアア……ン!!!

「いやあああ〜」

とんっ! 着地成功。

「あつぶねエー。」

おっ!!!屋上じゃねエか。」

ガラ……」ふう……

始めからこうやって登りゃよかった。」

穴の中からゾロが出て来た。

「ゾロ!!!やっぱりアンタか!!!(怒)」

「おらあああ」ボツコーン!!!

サンジも来たようだ。

「あいつら・・・やりやがった・・・!!」

「海賊達が・・・!!」「世界政府」に!!
「宣戦布告しやがったア~~~~!!!!」

「正気か貴様らア!!!!」
「全世界を敵に回して生きてられると思うなよオ!!!!!!」

「望むところだア~~~~!!!!」
「ウオオオオオオオオ!!!!」

「ぎゃああああああ。
「言い返されてビビってるよ。」

「ロビン!!!!」
「まだお前の口から聞いてねエ。」

「.....!?!」

「「生きたい」と言えエ!!!!」

「「ロビン!!」「ロビン!!」

「生きたい!!!!」
「.....!!私と一緒に海へ連れてって!!!!」

「うお~~~~ん。」

おめエら好きだーチキシヨ~~~~!!!!」
それを見ていたフランキーが泣いている。

ガコン・・・「!」

「跳ね橋が下りるぞー!!」

ゴゴゴゴゴゴ

「あいつらうまくいったみてエだな。」

「ム・・・武者ぶるいが・・・」ガタ ガタ
そげキングあんた恐いだけね。

「早く下ろせ。」うず うず

「悪そうな顔・・・!!」

「行くぞー!!!!」 ドン!!

ボキ ボキ

ゾロは今にも刀抜きそうだし、

ルフィ指鳴らしてるよ、やる気満々だな。

俺も頑張ろう!!

“ 宣戦布告？（後書き）

感想ください！！

“ 麦わら海賊団？ V S “ C P 9？ 開幕

司法の塔 入り口

「あそこに階段がある！！

早くロビンとこいくぞー！！」

「待て。」 「！！！！？」 「何だありやー！！」

呼び止めたのは六式使いフクロウだった。

「チャパパパパパ・・・！！

侵入されてしまったー！！

さっきの部屋へ行っても、

もうニコ・ロビンはいないぞー

ルツチが“正義の門？へ連れてったからな。」

「え！？」 「あ・・・あと長官もな。」

「今向かってるところだが行き方も教ええないし、おれ達「CP9」がそれをさせない。

お前達を抹殺する指令が下ってる！！
チャパパ。

お前達はおれ達を倒さなければ、
ニコ・ロビンを解放する事はできないのだ。
これを見る。」

フクロウは1つ鍵を取り出した。

「鍵！？」 「なんのだ。」

「ニコ・ロビンを捕らえている海楼石の手錠の鍵だ！」

「カイロウセキ??」

「能力者の悪魔の力を無効にする石よ！」

「あんた達が海に落ちるのと同じ効力らしいわ。」

「それでロビンは今も大人しくしてるのか、

本当は強いのに!! くやしいだろうな!!」

「お前達が万が一ニコ・ロビンを救い出す事があっても、海楼石はダイヤの様に硬いので、

その手錠は永遠にはずれる事はない。」

「!!!??」

「それでも良ければ、

このままニコ・ロビンを助けに行けチャパパ。」

「じゃよこせ!!!」ドゴオン!!!

ルフィはフクロウを狙ってゴムゴムの銃ヒストルを放つが剃でかわされた。

「・・・あいつもあの技使えるみてエだ。」

「慌てるな・・・!!」

「まだこの鍵が本物だとも言っていないぞ。」

「何だとオ!??」

「別の鍵かもしれないチャパパ・・・

この塔の中におれを入れて「CP9」は5人いるが、

それぞれ一つ鍵を持ってお前達を待っている。

おれ達はチャンスをあけているのだ。

「じゃあな。」タン! ヒュツ!!!

「そう言い残すとフクロウはどこかへ消えた。」

「ルッチ？つてのは、あのハト男の事か？」

「ああそうだ。」

「そいつとロビンちゃんが一緒にいるんだつたら、ルフィだけでも先に行かせよう。」

「ルフィ！お前はとにかくハト男をブツ飛ばせ！！ルフィを除いておれ達は7人、

――ここに5人いるらしい「CP9」から、

ロビンちゃんの手錠の鍵を5本手に入れ、ルフィを追う！！！！」

「ロビン君が門をくぐれば全て終わる。

何もかも時間との勝負だな。」

「負けは時間のロス。

全員死んでも勝て！！！！」

「「「「「「「「「「「「おう！！！！」」」」」」」」」」」

「ダダッ！！」

司法の塔 内部

「うわっ!!何だこの階段、ズレてるぞっ!!」

「本当だ。」

「やっぱりさっきの衝撃は何かあったんだ!!」

大丈夫か!?!この建物!!」

俺は今チヨツパーと行動している。

たしか原作でチヨツパーはクマドリと戦い、暴走して死にかけてた憶えがあるからだ。

「ギヤアアアア。」

「!!」 「何だ?」

「!!えっ、ゾロ!!そげキング!!」

「あ!!チヨツパー!!ツバサー!!」

そこには狼とキリンに追いかけられているゾロとそげキングがいた。

「何だ!?!楽しそう!!お・・・おーい!!」

「アホオ!!手錠に注目しやがれ!!」

「「2番」の手錠の鍵探してくれーっ!!」 「!?!」

よく見るとゾロとそげキングの腕が手錠でつながっていた。

「ハアハア。」ど ど ど ど!!

「2番つ2番つハア・・・!!」

「そうか鍵と手錠には番号があるのか!!」

「みたいだね、つたくあのバカ共!!」

「何してんだか・・・!!」

「ええ!? そんな事になってんのなら!!」

「おれがあいつらと戦つよ!!」

「ばかいえ相手は二人だ。」

「もしお前がやられたら、」

「手錠のままおれ達は何も出来ず殺されちまう。」

「頼む!! お前達がおれ達の希望だ!!」

「希望!? そんなの嬉しくねーぞ!!」 『デレー』

『サンジ、ナミ、フランキー。』

「誰かが“2番の鍵?”を手に入れたら、」

「すぐここへ届けてくれ!!!」

『頼んだぞ!!!』

「一番早く鍵を手に入れそうなのは・・・」

「サンジかな。」

「たぶん、あいつ強いし・・・」

「サンジを探そう! 頑張るぞ!! おれは“希望? だ!!”」ど
ど ど ど

!!

「頑張つて!!」

「ツバサもだよ。」

「冗談冗談。」

「冗談言ってる場合かよ!!!!」

“ 麦わら海賊団？ VS “ C P 9？ 開幕（後書き）

もう投稿し始めてから1週間です。早いねー！！

ツバサVSクマドリ

「さて、サンジはどこかなつと。」

「ん、あれナミじゃないのか!？」

チョッパーの言う方向を見ると、
クマドリに捕まったナミがいた。

「本当だ。しかもピンチっぽいね。」

「助けに行かなきゃ!！」

「突き殺そうかアアアよよい!!」

「あア絞め殺そうかアアアよよい!!」

「

「ウツ・・・!!」

「木枯し吹くこの今生でエ〜エ!!」

「春の芽吹きを待つも叶わず大往生。」

「せめて一度真つ赤にいとしい花弁咲かせエ、

「散らすがおいらの義理人情つ!!!」

「あの世に行ったらア・・・」

「おいらの死んだアおつかさんに・・・」

「伝えてやっておくんせエ・・・」

「おいら・・・おいらア元気でエ〜・・・!!」

殺ってるぜっ！！！！さア死ね、さアさア

「春・吟・情」！！！！」

「いやア！！！！」

トドメを刺そうととしていたその時。

「刻蹄？「桜」^{ロゼオ}！！！！」

「びよ！！！！？」ガコン！！！！

何者かがクマドリの前に飛び出した。

ドカア・・・ン！！！！「ぼえいつ！！！！」

チヨツパーの“刻蹄？「桜」が決まり、

クマドリは地面にめり込んだ。

「ハア・・・ハア、ケホ！！ケホ！！！！」

「ナミ！！！！大丈夫か！！！！？」

「ハア・・・ケホ・・・！！！！」

チヨツパー・・・！！！！

ありがとう助かった・・・」

「アレ何だ！？能力者か！？」

「わかんない！

あいつの髪タコみたいに動くから、

手も足も出せないの！！！！」

「それは「生命帰還」だよ！！！！

バイオフィールドバックって言うやつ。」

「ーそれより今の内よチヨツパー、ツバサ！！！！

早くここを離れましょう！！！！」ダッ！！！！

俺達は走り出した。

「何で！！！？あいつ倒さなきゃ鍵が！！！！」

「これでしょ」「！！！！」

ナミを鍵を出して見せた。

「鍵だけは気づかれずスツたのににげられなくて!!
みんなの状況わかる?」

「なアそれ何番って書いてある!??」

「番号? “3番?”」

ガクーン「ダメか。」

「何なのこの番号。」ヒュルルルルル

「!?!?」

ドカア・・・ン!!

「うわア。」「きゃ!!」「っ!!」

「何か・・・落ちてきた!!」

「え!!?!?人形!!?!?」

「違う!!?!?サンジ!!?!?」

「何だ!?!?この姿!!?!?」

落ちて来たのはツルツルになって、
体の凹凸の無くなったサンジだった。

「「CP9」にこんな事ができる“能力者?がいるんだ・・・!!
まさかサンジ君がやられるなんて・・・!!」

「・・・!!」

ガフツ・・・!!ハア・・・」

「サンジっ!!」

「・・・す・・・すま“ねエ・・・敗けた。」

・・・鍵・・・奪え・・・ながった。」

「!」

ナミは上の階から見下ろしている人影に気づいた。

「ま・・・待ってるサンジ!!」

すぐ応急処置するからな!!」

「サンジ君・・・本当に勝てなかった・・・？
まともに戦ったの・・・？」

相手はあの女でしょ・・・あんた女に甘いもんね。」

「・・・！！ 鍵の事は・・・すまなかった。」

「違うわよ！！そんな“騎士道”持つてる為に、
あなたの命まで取られちゃうって言うてるの！！！！
こんな目にあってもまだ貫くの！！？
死んだらどうすんの！！？」

「・・・！！ 別に・・・死にてエとは思わねエ。
・・・ただ、

女は蹴つたらいかんもんだとたたき込まれて育った。
だから・・・

・・・たとえ死んでもおれは女は蹴らん・・・！！！！！！」

「おお・・・！！」ぞくぞくつ・・・！

「カツケエ・・・！！」

「え・・・今・・・「カッコいい」って。」

「やっぱカッコよくない。」

「ばかね・・・ばか！！」ガン！！

ナミがサンジを天候棒クリマ・タクトで叩いた。

「おい何すんだナミーっ！！！！くらア（怒）」

「逃げ出す事も“騎士道”に反するのなら、

・・・せめてそっちは捨てなさいよ！！

ムダに死ぬ事は話が別よ！！

あの女は私に任せて！！！！

容赦しない。

「それとあなたの“騎士道”……少し見直したわ。」

「俺も。」

「！ え……今……惚れ直した」って。」

「そうは言っつてねエっ!!」「ガン！」

「私は、優しくしないわよ!!！」

上の階にから見ていたカリファに向かい声をかける。

「私もよ、気が合いそうね……。」

ナミが階段を上り始めた時、

「よよい!! 待ア~~~~てエ~~~~!!」

あ逃がしてエ!!!

あ逃がしてなア~~~~る~~~~も~~~~のかア!!!」

現れたのはクマドリだった。

「タコ男!!！」

「ナミはあの女を!!」

あいつはおれ達が何とかするよ!!！」

「わかった!!！」

「刻蹄?……」クロス「十字架」!!！」

ズドオン!!！」「よよゴオ!!！」

「チョッパー行くぞ!!！」

「おう!!！」

「「生命帰還」「髪縛り?!!!!！」

ビュルルル!!！」

「危ね!!」あの髪面倒だな。

「「剃」「ヒュッ!!」

「チョッパの方行つたな？」

「どこだ?」「「チョッパー!!上!!」」「!?!」

「「指銃」「Q」「!!」」

「うお!!」「ズボン!!」

クマドリは手に持っている杖を、

ビリヤードの様に使い刺そうとしてきた。

「そろそろ本気出させて貰うとするか。」「剃」「!!」」「ヒュッ!!」

「「指銃」「Q」「!!」」「ビュッ!!」

「「鉄塊」「!!」」

ガキン!!!!

「!?!」

「よよい!!六式を使ったア〜てめエ〜はア〜何者だア〜?」

「憶えてねエか？」

「5年前お前らの殺しそこねた元仲間だよ。」

「よよい!!」

「てめエ〜もしやア〜ウインなア〜のかア〜?」

「しかしあいつア〜男だぜエ〜!!」

「今は分けあつて女になつちまつたんだ。

「それより早くやるうぜ!!」

「生命帰還?」「紙絵武身」「

シユルル

「「指銃」「Q」「!!」」「ビュッ!!」

「紙^{カミ}絵^エ」 ヒラリ

「鳥の腕力から放つ「嵐脚」……
嵐^{ラン}手^{シュ}刀^{トウ}」！！！！」

「鉄^{テツ}塊^{カイ}」！！」

ガキン！！「ヨボオ！！」

鉄塊されるとダルいな、
でもちよつとは効いたか？
さあどんどん行くか。

ツバサVSクマドリ(後書き)

クマドリとツバサの書いじり。

“ためらいの橋？到着（前書き）”

35000PV 6000ユニーク突破です！！

読んで頂きありがとうございます！！

“ ためらいの橋？到着

『チヨツパー！！お前に頼みたい事がある！！』
『何だ！？』

『サンジに水をかけて来てくれ！！』
『そうすればサンジは元に戻るハズだ！！』

『ホントか！！？』

『よよい！！勝負の最中に話しをするたアゝ失礼千万！！』
『指銃』シガン 『Q』キユ 『！！』

ビュツ！！

『ちっ！！』テツカイ 『鉄塊』

ガキン！！

『とにかく頼む！！お前らだけが希望なんだ！！』
『サンジにも同じように伝えといてくれ！！』
『分かった！！』ダツ！！

『水はどこにあるかな？給仕室かな。
急げ！！俺は“希望？なんだ！！がんばるぞ！！』

『獅子指銃』シシガン 『！！』

指の形をした髪がツバサに迫る。

『くっ！！』ソル 『剃』ソル 『！！』 『ヒュツ

ドドドドドオン！！！！

「そろそろ本当のスピード見せてやるか。
おいクマドリ!!普通の「剃」の移動速度は時速90km前後。
だけど俺は・・・「剃」「ビュッ!!」

「消えた!?!」
「ヒュッ!!」

ツバサはクマドリの後ろに現れた。

「能力との併用で時速150km以上だ!!」

「嵐爪銃」!!」

ズドオン!!「ぶエ!!!!」

「悪いなやっぱり本当の速さ見せらんないわ。」

「!?!」

「・・・速すぎ?るから。」剃「!!」「ビュッ!!」

「嵐爪銃」乱?!!!!」

「!?!」

ズドドドドオン!!!!」

クマドリは壁をつき抜けそのまま気絶した。

「悪い、俺急いでんだ。」

司法の塔 1階

ザッバアン!!」

「え!?!ツバサちゃんは、おれが“希望?だつて?」

「うん！！そう伝えてくれだって。
多分ゾロ達がピンチだから、
助けてやって欲しいんだと思う。」

『サンジだけが最後の希望なんだ！！お願い！！！！』
妄想
「ムフフフ。」

「ダメだ、全然聞いてねエ。」

ためらいの橋 支柱内部

「JETバズーカ？！！！！」
ズドオン！！！！

それを喰らったルッチは吹っ飛んだ。

あーやってるやってる。

「フランキー！！！！ロビンを頼むっ！！！！！！」

「スーパー任せとけ！！！！！！」

俺も手伝うか。「刺^{スル}！！！！」ビュッ！！

「フランキー！！俺も行く！！掴まれ！！」がしっ
バサッ
バ
サッ

「おう!! わかった!! って、
え!?! お前どうやってあいつらの中通って来たんだ!?!」

「俺も六式使いで剃が使えるからだよ。」

「じゃあ、お前もルツチとかの仲間だったのか?」

「まア5年前の話だけだね。」

それより急ごう!?!」

バサッ バサッ

「あ、あれ!! ロビンなんじゃない!!?!」

「本当か!?!」

ロビンは綱で結ばれ、

スパンダムに乱暴に引きずられている。

「あいつ後で絶対ぶん殴る。急ぐぞ!!」

ド ウ ン!! 「ポカバ!!!!」 「!!!!?!」

いきなりロビンを引きずっていたスパンダムが吹き飛んだ。

「ハデバラぽげぴゃ!!!!」

ボゴオ・・・ン!!!! 「長官殿!!!!」

ボ ボボ ボオン

「うわア!!!!」 「ぎゃあ!!!!」

ロビンの周りにいた海兵達も、
正体不明の炎の球に吹き飛ばされていく。

「もしかしてウソツプ!?」

「ウソツプってあの鼻の長いヤツか?
たいしたもんじゃねエか!」

その時ロビンが走り出した。

「そろそろ出番だ。落としていいよな?」

「おう!! スーパー任せろ!!」

「ニコ・ロビンが逃げます!!!」

「逃がすな!!! バカ共!!!」

撃つていい!! 殺さねエ程度に、撃ち殺せ!!!」

「えエ!!!?」

「撃てエ!!!」ドドドドド!!!」

ガキキキン!!!」

全ての銃弾が金属音と共にね返された。

「んな!!!」 「ええ!!!?」

「何だ!!!? コイツはア!!!?」

ロビンの前に立っていたのは“改造人間^{サイボーグ}? フランキーだった。

「・・・あなた。」

「丈夫なのよ、鉄だから」

シユタツ「間に合ってよかった。」

「ツバサさん!!!」

「ひー!!」 ビビり過ぎてキモい。

『フランキー君、フランキー君。こちらぞげキング。』

「ん？あん？この電伝虫はおめー・・・」

『ナミから私が受け取った！』

それよりその付近に、

小さな“赤い布の包み”が落ちているハズだ。』

「おお・・・あるぞ。」

どよ どよ

『鍵が2本入ってる。』

君のと合わせて鍵は全て揃うハズだ!!』

「鍵全部~~~~!!?!?!?え ええ え」 ホントにキモい

『確かに届けたぞ。』

“ ためらいの橋？到着（後書き） ”

忙しくて遅くなってしまいました。

感想等があれば是非ください待っています。

勝利！！（前書き）

40000PV突破です！！

勝利！！

『少佐以下出陣不要、「大佐」及び「中佐」のみ。精鋭200名により、速やかに始末せよ。』

俺達はロビンの手錠を外すのに成功したが、まだルフィとルッチの決闘の勝負がついていないため、脱出出来ずにいた。

『かかれ！！ニコ・ロビンを奪還せよ！！！！』
わああああ！！！！

「さーてとつやりますか！！」「剃シ」「ビュッ！！

「氣イつける！！」「能力者？もまざってるぞ！！！！」
フランキーの殴りかかった相手の体が、バラバラにわかれボール状になった。

「それは・・・」
お互い様よ！！」「ゴキ！！」「ゴキ！！！！」
ロビンが関節技を決めていく。

「そうだな！！！！」嵐脚ランキヤク」「巨大斬ビガーザン？」
ブンッ！！！！

ズストーオン！！！！」「うわあああ！！！！」
巨大な斬撃を放ち海兵達を吹き飛ばした。

「あの技は……」

「はい、間違いないかと……」

「生きていたか……」 “鷹爪のウイン?!!”
まさか海賊になっているとは……!!!!」

「一緒に帰るぞオ!!!!ロビ~~~~ン!!!!」

『ぜ……!!全艦へ報告!!!!』

「CP9」ロブ・ルッチ氏がたつた今……!!!!
海賊“麦わらのルフィ?に!!!!
敗れましたア!!!!」

「何だとオ!!!？」

「やっとか遅エよ。」

「……そんなバカな……!!
サイファーポール史上最強といわれる現在の「CP9」の……
そのリーダー。」

ロブ・ルッチ氏までもが海賊に敗れるなんて……!!!!」

「ウ・・・ウウ、
ル・・・ルファイが勝ったアーーー!!!」

「ヒヤヒヤさせやがって。」

「ついにやったか!!! 麦わらア!!!」

「ルファイ・・・!!!」

全員すぐに脱出船へ!!! 船を出すわよ!!!」

「やったー!!! ルファイ!!!」

『やったぜ麦わらさ~~~~ん!!!』

『うお~~~~!!!』

「!!!?」

どこからか声がする。

「え?」

『バ・・・バカお前ら向こうまで聞こえちまうだろ!!!』

「おい!!! なんだこの声は!!!」

『いいんだ知らせてやるんだよ!!!』

「わかりません!!! 電伝虫を通してどこからか!!!」

『アニキー!!! アニキー!!!』

『やめる!!!』

このまま逃げりやおれ達は死んだ事になったのに!!!』

「お前ら・・・!!!」

『おれ達ア全員無事ですよー!!!
逃走手段もあるんでこっちは大丈夫!!
後で生きて会いましょう!!』
バスターコールの砲撃で死んだと思われていた、
ガレーラやフランキー一家は無事だったようだ。

「おめーらア~~~~!!!!
バキャローおべーらの心配なんざするかアバガァー!!!!」

「おい!!ルファイ!!
急いでこっちへ来いよ!!
逃げなきゃ助からねんだ!!
ゴムゴムでこっちへ飛んで来い!!
後はおれが担いでやるから!!
周りは海と軍艦だらけだ!!
ここにいたら殺されちまうぞ!!!!」

「・・・ハア・・・ダメだ・・・。
体がよ・・・!!ぜんぜん・・・動がねエ・・・!!」

「しょうがねエ俺が行く!!早く船を出せ!!」バサッ!!
「ツバサ!!」
「全員急いで船へ!!」

『撃て!!』
ボツカアァン!!

「え!!!?うそっ!!!脱出船が!!!!」
せっかく奪った脱出船が海軍の大砲により沈んで行く。

「何てこつた・・・!!!絶望的だ!!!」

あの船以外にここからの脱出手段はねえんだぞ!!!」

『撃て!!!』

ドカーン!!!ボコオン!!!

『第二支柱へ追いつめるー!!!』

「くそっ!!!とうとう橋なんかなくなっちゃった!!!
支柱に追い込まれた!!!」

「これ以上何も出来ねえぞー!!!っ!!!」

「誰だ・・・誰なんだよこの声一体!!!」

「下?下を見る?」

「やっぱり聞こえる!!!何だ!?下つて・・・」

「下を見るつて・・・!!!」

「何言つてんの!?トナカイちゃん!!!」

「助かるんだ・・・!!!」

助けに来てくれたんだ!!!

まだおれ達には・・・!!!

仲間がいるじゃねえかアっ!!!」

「チョッパー下見た?」「見たアー!!! (感)」

「みんなっ!!!飛び込むぞ!!!」

何隻もの軍艦の間をすり抜け砲弾をかわし逃げきった。

「このケンカ!!」

「おれ達の勝ちだア!!!!!!」

「oooooooooooo」
「よしやーア!!!!」

勝利！！（後書き）

わかる人はわかると思いますが、

“巨大斬^{じがーザン}？はBigger thanです。

英語の勉強をしている最中に、

ふつと頭に浮かんだので使ってみました！！

読んで下さっている皆様に頼みがあります。

主人公の新しい技を考えてくれませんか？

全員が追加手配（前書き）

7000ユニーク突破です!!

「うお～～次の島へ進めるぞーっ!!」

数日後

フランキー一家のスクエアアシスターズが、
船の完成を知らせに来てくれた。

「よし!すぐ行こっぜー!!」

「うおおー!!!!」

「麦～～わら～～さ～～ん!!!!」

「!?!」

声のした方を見るとフランキー一家達がこちらに走ってくる。

「フランキー一家・・・!!」

「あんた達どうしたんだわいな?

息切らして・・・!!」

「ハア・・・ハア・・・実は・・・

無理聞いて貰おうと。

・・・手配書・・・!!見ましたか!?

「手配書?」

「あんた・・・!!」

とんでもねえ額ついてるぜ!!麦わらさん。

それに他のみんなも追加手配されちまつてる!!」

「おれもか！？やった。」

「話すより・・・見てくれ!!!」
「ばさばさっ！」

そう言いつと持って来た手配書を広げて見せた。

「あんたら8人全員の首に賞金が!!!」

「麦わらのルフィ？ 懸賞金3億ベリ」

「海賊狩りのゾロ？ 懸賞金1億2000万ベリ」

「鷹爪のツバサ？ 懸賞金1億ベリ」

「悪魔の子？ニコ・ロビン 懸賞金8000万ベリ」

「泥棒猫？ナミ 懸賞金1600万ベリ」

「わたあめ大好きチョッパー？【ペット】 懸賞金100万ベリ」

「狙撃の王様？そげキング 懸賞金3000万ベリ」

「黒足のサンジ？ 懸賞金7700万ベリ」

「わっはっはっは!!!」

うはーっ!!!上がったー!!!」

「フン。」

「おれもこれで立派な賞金首だな!!!」

チョッパーも暴走せずに戦ったので、

原作の50ベリより賞金が高くなってる。

数時間後

「お前らウソツプの事はちゃんとハラを括つたな!？」
ゾロがみんなに向かつて聞いた。

まだウソツプは帰って来ていない。

「これが“筋”？つてもんだ・・・」

「・・・わかった。」

「ダメされた・・・、

町の雑誌の記者だつて言つてたのに、

かわいく撮れてるからそれはいいけど、

はあ・・・とうとう私も賞金首か・・・」

「それにしてもすごいなツバサちゃん。」

「最初から1億ベリーだもんな!!ししし!!」

「たぶん元CP9つてのがバレたんだと思う。」

言つてなかったけど、

なんでサンジが落ち込んでいないかと言うと、

実は、大佐達との乱闘の時に、

写真撮ろうとしている奴を見つけて、

「剃シ」で近寄つて気づかれなないように、

レンズのキャップを外しておいたからなんだよね。

あまりに原作のサンジが可哀想だったから。

「ナミさ〜ん、

おれの手配書見て惚れなおした〜?」

「ハイハイ。」

やっぱやめときゃよかった。

「忘れ物するなよー!!!!」

船とフランキー貰って出航するぞ。」

「「「「「おオーっ!!!!」」」」」

海軍本部

「異例中の異例だな。」

少数とはいえ・・・一味全員が賞金首とは・・・

“トータルバウンティ総合賞金額?が7億を越えている。

しかもこの“鷹爪ツバサ”は、

実は元「CP9」のNo.2“ウィン”?だ。」

全員が追加手配（後書き）

ツバサの技案待ってます！！

“魔の三角地帯？（前書き）”

遅くなりました。すいません！！

“魔の三角地帯？”

「ツバサー！！今日女子3人で風呂入らない？」

「え！？あつその俺は・・・たまにはいいわね。」え！？」

「じゃあ決まり！！行きましょ。」

「えっ！？ちよっ！！」

「ツバサー！！早くしなさいよ！！」

ザバアーツ

あーあ結局入っちゃったよ恥ずかしー。

「ハアーやつぱこんな広い風呂は、
みんなで入ないと勿体ないわね。」

「ツバサさん何恥ずかしがっているの？」

「あ・・・いや、その・・・」

「もしかして見られるのが恥ずかしいの？」

「ちっ違っむしろ逆っ！！」

「え！？見られたいの？」

「そっちの逆じゃねーよ！！！！」

見るのが恥ずかしいってどういう意味！！！！」

「なんで！？レズなの？」

「だから違うーう！！いいから話聞け！！」

みんなにはまだ話してないけど、

実は俺、元男なんだよね……」

「またまた〜。ツバサったらマジメに話なさいよ。」

「オカマって事？」

「大マジメだし、ロビン俺はオカマじゃねえぞ！！」

「そうよね、かわいいし体も女だし……」

「なんて説明したらいいのかな？」

目が覚めたら女に変わってたていうか、
変えられていたっていうか。」

「そんな事あるの！！？」

「そつえば「CP9」はあなたに気付いていなかったわ。
それに悪魔の実の能力と考えればあり得なくもないわね。」

「確かに……」

気付いてたら直ぐに殺しにくるわよね普通。」

「うん。ロビンの言った通りだよ。」

ホルホルの実の“ホルモン人間？、

“カマバツカ王国女王？エンポリオ・イワンコフ。
俺はソイツに女に変えられた。

ソイツの女ホルモンを受けると心と体が女になる。」

「ツバサの男版ってどんなかなア・・・」
「きつとカッコいいでしょうね。」

「他人事だと思いやがって!!」

「フフ・・・でも心も女になるなら何で男口調なのかしら・・・」
「たしかに!!」

「それは男の誇りだよ。」

「女なのに?」

「うっせえ!!」

「はー、いいお湯でした!」

「いいよなーナミは、俺達は足湯ぐらいしか入れねエのに・・・」

「あんたは飛べるんだからいいじゃない!!」

『おい!!海に何か浮いてるぞ。』
ジムにいたゾロが何やら発見したようだ。

「! なんだなんだ、タル!?」
「見る!!」 “宝? って書いてあるぞ!!!!”

よく見ると海神御宝前と書かれた旗のついた樽が流れてきた。

「もしかして!!」

「宝船」の落とし物じゃねエか!？」

「お宝!？」

「残念、お酒と保存食よ。」

ナミが言うには「流し樽」といつて、

航海の無事を祈って海の守護神にお供え物をするらしい。

「飲んだ後は空樽に、

新しいお供えを入れて流すのがならわしよ。」

「へー。」

「開ける開ける早く!」

「おい神様ー!!!おやつ貰うぞー!!!」

「空島で“神?をぶつ飛ばしてきたのはどこのどいつだよ……」

「よし開いた。」ガポツ!

「わっ!!!」シュルルル……

「何か飛んだ!!!」

「パン!!!」!？」

樽の蓋を開けたとたん中から何かが飛び出し赤く光った。

「何だ!!!?」赤い光……!？」

「……!!!何!?!どついう事!?!」

「発光弾?よ。」

「……ただのイタズラならいいけど……」

もしかして……

この船はこれから誰かに狙われるかも知れない。」

「まさか……そういう罠なのか!？」

樽を開けた事でおれ達がここにいると、

今誰かに知らせちまったのか!？」

「みんな持ち場に!!南南東に逃げるわよ!!」

5分後よ!!」大嵐(おおシケ)？が来る!!!!」

「もしかして次の“編”^{エピソード}に入るのか？」

「ツバサどうしたの!？」

「いや何でもない!!」

「はあ……越えた……」

「越えたはいいが……何だこの海。

まだ夜でもねエだろうに……」

霧が深すぎて不気味な程暗いな。」

「……もしかして……」

……例の海域に踏み込んだって事かしら……

まだ心の準備が……!!」

「そうだ氣イ抜くなよ……」

まさにこの海域はもう……あの有名な、

フロリアネライアングル
“魔の三角地帯”

“魔の三角地帯？は毎年100隻以上の船が謎の消失を遂げ、

さらに死者を乗せた幽霊船ゴーストシップがさ迷っているといわれているらしい。

「準備だ！！悪霊退散グッズで身をかためねば！！」

「ウソツプ俺にもかしてくれー！！！」

「ヨ ホ ホ ホ 〽 . . . 」ギギギ

「何だ . . . 音楽 ?」

「 . . . ヨ ホ ホ ホ | . . . 」

振り返った先には . . .

「出た ! ! !」

「ゴーストシップ
幽霊船 ! ! !」

“魔の三角地帯？”（後書き）

ここから先ツバサは原作知識ありません。

“ 死んで骨だけ？ブルック登場（前書き）

9000ユニーク60000PV突破です!!!

“ 死んで骨だけ？ブルツク登場

「ヨホホホホ！！！！」

ハイどうもみなさん！！ごきげんよう！！！！
わたくし

私この度この船でご厄介になる事になりました。

“ 死んで骨だけ？ブルツクです！！！！”

どうぞよろしく！！！！”

紅茶の入ったティーカップを持った、

アフロガイコツが自己紹介をした。

「コッコッコッ ぶざげんな！！！！何だコイツは！！！！」

「ヨホホホ おやおや手厳シィー！！！！」

ルフィが宝探して来ると船に乗り込んでしまい、
宝ではなく代わりに生きた“ガイコツ？”を連れて来てしまった。
オマケに仲間にするらしい。

コイツの事だ本当に仲間にしてしまっただろう。

「ガイコツだー！！！！っ！！！！」

「ガイコツが喋って動いてアフロなわけがねエ！！！！」

これは夢だ、絶対夢だ！！！！”

「おや美しいお嬢さん！！！！」

パンツ、見せてもらってよろしいですか？”

「やめんかセクハラガイコツ！！！！（怒）」

「おいルフィ！！！！こいつは何だ！！！！」

「私^{わたくし}紳士ですので“食事を待つ?、
そんな何げない一時が好きで・・・
デイナーナ〜アツ デイナーナ〜アツ
イエーカモン」
カンカン カカン
ナイフとフォークでコップを叩きデイナーコールを شدした。
「うるせエよ!! 黙って待ってる!!!」

「料理長!! ドリンクは牛乳でお願いしますよ!!」

「ところでコロボツクル。」

「あ、ブルックです私。
えーと・・・あ、お名前まだ・・・」

「おれはルフィだ。
ところでお前一体何なんだ？」

「どんだけ互いを知らねエんだお前ら!!!!」

キッチンからサンジが出てきた。

「さアガイコツを追い出すのは後回した。
ひとまず食べ！」

「んまほー!!」

おいブルックいっぱい食べ、サンジのメシは最高だぞ!!」

「私、何だか・・・!! お腹より胸がいっぱいで・・・」

「お嬢さんのお肉少し大きいですね。
替えて貰ってもよろしいですか？」

「おかわりあるから自分の食べよー!!」

食後

「ヨミヨミの実?・・・!?!」
「やっぱり“悪魔の実”?か・・・」

ブルックは喋るガイコツになった理由を話してくれた。

ブルックはヨミヨミの実の「復活人間」で、
二度の人生を約束されていた。
数十年前、

ブルックの入っていた海賊は同業者と戦い全滅。
その日、能力が発動したが霧が深くて自分の死体が見つからず、
見つけた時には死体は白骨化していた。

「じゃ、お前オバケじゃねエんだな!?つまり!!」

「ええ、私オバケ大嫌いですから!!」

そんなものの姿見たら泣き叫びますよ私!!!」

「あんだ鏡見た事あるの?」
ナミが鏡を差し出してきた。

「ギャー!!!やめて下さい鏡は!!!」

「え!?おいちよつと待て!!」

お前何で……!!!!
鏡に映らねエんだ!!!?」

「ほんとか!?!?スゲー!?!?な!?!?」

ブルツクはウソツプのとなりにいるハズなのに、
何故か鏡に映っていないかった。

「よく見りやお前“影?もねエじゃねエか!?!?”」

ブルツクの足元を見てみると、
足元から伸びているハズの影がなかった。

「うわ!?!?!本当だ!?!?!」

お前は実は何者なんだ!?!?!?!?!」

・
・
・
ズズ……ミルクをすすった。

「いや落ちつくところかよ!?!?!」

「全てを一気に語るには……」

私がこの海を漂った時間はあまりに長い年月……!!?!?!

私がガイコツである事と・・・
影がない事とは全く別のお話なのです。」

「・・・・・・・・・・」

「続く。」

「今話せよ!!! (怒)」

ブルツクの話によると、ある男に“影?を奪われたらしい。
影がない者は直射日光を浴びると消滅し、
鏡や写真にも写れない体になるらしい。

「つまり私は光に拒まれる存在で!!仲間全滅。

“死んで骨だけ?ブルツクです。どうぞよろしく!!
ヨホホホ!!」

「何で明るいんだよ!!」

「さんざんだな、お前の人生。」

「なのに“コツコツ?生きてました!!骨だけに!!!」

「うるせエよ!!!」

「ヨホホホホホ!!ヨホホホホホ!!」

「おいおいどうした大丈夫か?」

「今日はなんて素敵な日でしょう!!!
人に逢えた!!!」

「?」

「今日か明日か、
日の変わり目もわからないこの霧の深い暗い海で、
たった一人舵のきかない大きな船に、
ただ揺られてさ迷う事 数十年！！
私、本つつ当に淋しかったんですよ！！！！
淋しくて怖くて・・・！！！！死にたかった！！！！
長生きはするものですね！！！！人は“喜び？！！！！”
私にとってあなた達は“喜び？です！！！！”
ヨホホホ！！！！」

「ダメだ！！俺！！」うるっ！！
コイツ可哀想過ぎる！！
「ツバサ・・・」

「私の為に泣いてくれるのですか？
私も涙さえ涸れていなければ、泣いて喜びたい所。」

「・・・！！！！」

「あなたが私を仲間に誘ってくれましたね！！
本当に嬉しかったのです。どうもありがとう。
だけど本当は断らなければ！！」

「おい！！何でだよ！！」

「先程も話した様に私は“影？を奪われ、
太陽の下では生きていけない体！
今はこの魔の海の霧に守られているのです。
あなた方と一緒にこの海を出ても、

私の体が消滅するのも時間の問題。
私はここに残って“影”を取り返せる、
奇跡の日を待つ事にします!!
ヨホホホ。」

ズズン!!

「!? わっ何の震動だ!？」

バン!!

ブルックが部屋を飛び出した。

「何て事!!」

まさかこの船はもう「監視下」にあったのか!!?
見て下さい!!前方が門で閉ざされました。

今の震動はこれです。

これは門の裏側!!・・・という事は!!

船の後方を見て下さい!!!!」

ブルックの言う通り後方を見ると、
不気味な城の立っている島があった。

「これは海をさ迷う“ゴースト島”アイランド・・・!!!!
「スリラーバーク」!!!!!!」

“ 死んで骨だけ？ブルック登場（後書き）

ほぼ写しですいません。

ツバサの技名 募集します。

相棒 “海星?” (前書き)

いつの間にか100000ユーロ突破です。
ありがとうございます!!

相棒 “海星”

俺達はスリラーバークに閉じ込められ、ルフィの「冒険準備万端病」のおかげで、上陸したい奴はすることになった。

で今、フランキーのソルジャードックシステムの、6つの内の最後の1つ“チャンネル2？のお披露目をしている。試しに乗り込んだのは「島に入つてはいけない病」の、ナミ、ウソップ、チョッパーの3人。

「出動！！買い出し船っ！！」ガラララララ・・・

「ミニメリー2号！！！！」

4人乗り蒸気機関「外輪船」だ！！！！」

シャッターが開き、中から見馴れた船首の小舟が出てきた。

「メリーだメリーが小舟で蘇った~~~~！！！！」

「こんな素敵なプレゼントが隠れてたなんて！！

ありがとうフランキー！！！！」

「最高の心遣いだな。」

「こんな買い出し船ならいくらでも買い出すぞおれは。」

「うほーかわねーはやくかわねー！！！！」

「待ておれ達はこれから実際に乗るんだ、ひとまずあいつらに堪能させてやれ。」

「そついやアフランキーに頼みたい事があるんだ！！！！」

「何だ？武器でも造るのか？」

「ちよつとね。」

フランキーの兵器開発室

「これなんだけど・・・」

ポケットに入れていた袋を取り出し、
フランキーの前に入っていた中身を出した。

「宝石と手錠？これで何するんだ？」
袋から出したのは手錠3つと宝石

「それはダイヤモンドと海楼石の手錠だよ。
エニエス・ロビーで盗んで来たんだ。」

「なるほど能力者対抗用の武器か。」

「その通り、出来ればこんな感じで頼む。」
そう言って持ってきたイメージ図を見せる
「わかった！！スーパー任せろ！！」

「キヤアアアア！！！！」「！！」
遠くから叫び声がある。

「もしかしてナミ達じゃ・・・」
俺ちよつと見てくるからやっといて！！」

ダッ！！

甲板

「みんな！！どうしたの！！？」

「それが！！！」

「島の方からウソップ達の叫び声が！！！」

シユルルル・・・ドボオン！！「！？？」

「勝手に錨いかりがつ！！！！！」

バン・・・！！ 「ん！？ ！！？」

「・・・！！？」

何だ、ハッチが急に開いた！？

・・・誰か触ったか！？

「ん？」むに によーーーーん「ん？」

急にルフィの顔が伸びた。

「おいルフィ！！てめエ何やってんだ、

こんな時にフザケやがって！！！」

「にっ！！ひがうんら（違うんだ）！！ひがうひがう（違う違う）

!!

おえあんおやつ えええよ（おれなんもやってねえよ）!!

「ガール……」

「？ 猛獣の声……!?」

スラッ!! 「ん!!?」

今度はゾロの刀が勝手に鞘から抜かれた。
そしてそのままルフィの方へ。

「え!? 危ない!!」 ドカッ!! 「ぐへっ!!」

ザクッ!!!!

「悪い!! 刀が勝手に……!!!!?」

「変だね、俺達以外に誰かいるのかな？」

「……さつき、猛獣の唸り声を聞いたわ。」

「猛獣!?!」

「ますますわからねエ……!!!!」

数時間後

俺達の船は島の入口の巨大クモの
巣に捕まっていた。

「正面には計算されたとしか思えねエ位置で島の入口が誘ってる・
・
ゴースト達の手招きまで見えてきそうだ。」

「なーにごちゃごちゃ言ってるんだゾロー!!」

「ホラおめエも来い!!」

「行つてらっしやーい!!」

「ツバサは来ないのか？」

「ここにいたってヒマなんだ。行くぞ!!
弁当わけてやるからよ ししし!!」

「ゴメンやりたい事があるんだ!!
それに船番はいたほうがいいだろ?」

「そうだな!!肉とか盗まれたら大変だしな!!」

「忘れるところだった!!ホラよっ!!」ひよいつ
フランキーが何やら縦長の袋をこちらに投げてよこした。

ぱすっ!

「もしかしてもう出来たのか!？」

「あつたりめエだ!！」

「何だ?それ。」

ルフィが気になって聞いてくる。

「ちょっとね、後で見せるよ!！」

「ありがとうフランキー!！」

「また何か造って欲しかったら言えよ!！」

さてと性能を見ますか!！」

俺は袋から中身を取り出した。

フランキーに作って貰ったのは、刀とグローブだ。

そう、能力者に対抗するために刃などに海楼石をしこんだのだ。

フランキーは「もっとハデにミサイルとか仕込もうか?」

とか聞いて来たが、

「頑丈にだけしてくれ。」と言っというた。

刀は日本刀で、刃は乱刃。

刃文の部分が海楼石で出来ている。

グローブは関節以外全体的に海楼石が使われていて、
自然系ロキアの能力者も掴める。

「フランキーって何でも造れるんだな、
とにかくこれで自然系ロキアに触れる!!」

ヒラリ

「ん？手紙？」

『この刀の柄の頭にはライト機能をつけておいたぜ!!
名前は自由にしてくれ!!
ちなみにおれの考えたのは「スーパーフランキーチャンピオン丸」
だ!!』

「ライト機能？まあいいや。
名前かア、どうしようかな。

フランキーと言えば星のマークだよな、
それと海楼石使ってるから………星海。
いやこの刀の名前は“海星”かいせい？

うん、いい!! “海星”かいせいにしよう!!
ん？もう1時過ぎてたのか。」
時計を見ると夜中の1時を過ぎていた。

「宝を探せ!!早くしろ!!」

あれ敵襲あいかくかな？

相棒 “海星？”（後書き）

ツバサに刀持たせる事にしました。
そうしないと対三大将の時不利なので・・・

黒幕

「早くしろ!!宝を探せ!!」

ピンクの髪の女がゾンビみたいな奴らに命令した。
そんじゃ武器試すか、「^{ソル}剃」

「ヘイ、ペローナ様!!」

ズバツ!!「ぐあ!!」

急にゾンビ兵の一人が倒れ、
口から何か黒いものが出ていった。
その後も次々とゾンビ兵が倒れていった。

「どうした!!」

「急に兄弟達が!!ぐあ!!」ズバツ!!

「浄化されていきます!!」

「何者だ!!もしや“鼻唄”か……!!?」

すっ……「残念、違っよ。」

「剃」での移動をやめ姿を現す。

「何者だ貴様は!!」

「聞きたいのはこっちの方だよ。」

「ん!? お前は1億首の“鷹爪のツバサ”!!
お前を仕留めてモリア様へのお土産にしよう!!
“ネガティブゴースト”!!」

ホロホロホロ・・・ ネガティブ ネガティブ
変なゴーストがコチラに飛んで来る。

「ネガティブ? 一応かわすか。」カミエ紙絵」
ヒラリ

「・・・なんだアイツは!!
ペローナ様の“ネガティブゴースト? をかわした!!」

「チツ、避けたか。次は外さねエ!!」

「ソル剃」ソルビュツ!!」

「消えた!？」

「ソル剃」でペローナに近付き後ろから押さえる。
がしっ「うっ!! カが抜ける・・・」

「海楼石だよ。」

「・・・ペローナ様ア!!!」

何だアイツは!!! 腐れやベエ!!!」

「何をしている！！早く助ける！！」

「くくくおおお！！！！」

ゾンビ達が襲いかかってくるので海星を構える。

ズバツ！！

「くくくあ！！！！」

斬られたゾンビの口からまた何か黒いものが出ていく。

「さてとペローナだっけ？全て吐いて貰おうか。」

「色々教えてくれてありがとうね〜！！」バイバイ

「てめー覚えてろよ！！」

そう言いながらペローナは去って行った。

「敵は“王下七武海ゲッコウモリア？か・・・
元懸賞金3億2000万ベリーの謎の多い男。」

カゲカゲの実の能力者で相手の影を奪い従えさせれる。
でもこの“海星かいせい？ならさっきのゾンビの様に浄化できる！！

ガタガタツ！！

ん？今ダイニングの方で音がしたような………？

ダイニングに行ってみるとそこには……

「ルフィにゾロ、サンジ……！」

そこにはデコレートされた主力三人が椅子に並べられていた。

「三人共“影”が無くなってる………！！

おいっ！！起きろっ！！！！」ゆさゆさ

肩を揺するが全く起きない。

数十分後

「おーいルフィ………！！！！

ゾロ………！！サンジ………！！！！」

甲板の方からチョッパーの音がする。

「ん？帰って来たか……！！」ガチャ

「おかえりみんな………！！ルフィ達はここだよ……！！」

「ツバサ……！！」

ダイニング

「なるほど、ルフィの影が巨人ゾンビに……でナミが拐われたと……」

「それより先に飯だ!!!」

ルフィが叫ぶ、三人共さつき叩き起こされた。

「ご飯なら死守しといたから大丈夫だよ。」

「ほんとかア!!!」

ルフィが冷蔵庫に走って行った。

「で、これからゲッコウ・モリアぶっ飛ばしに行つて、ナミと影を取り戻してガイコツを仲間に入れると。OK理解した。」

「さっさと乗り込むぞ。」

ゾロが言った

「しししし!!!よっしゃア!!!」

野郎共っ!!!反撃の準備をしろ!!!

スリラーバークを吹き飛ばすぞオー!!!

「ウオオオオ!!!」

島の入り口

「しかし、おれ達の影の入ったゾンビっての、探し出すのは一苦労しそうだな。」

「……ゾンビなんて探さなくていいよ。おれのゾンビは見てみたいけどな。」

「何言ってるんだ、おれ達やこのままの体じゃ、二度と太陽の下へ出られねえんだぞ。」
「当たり前のように言うルフィにゾロが言った。」

「だってお前……
あの時ゾンビのおっさんが言ってる、
ゲッコー・モリアぶっ飛ばせばみんなの影が戻るって！」

「!？」

「………た………確かに言った。
………またコイツは核心を………」

ほんとだよ、たまに突く所がルフィのスゴい所だよ。

「とにかくまーおれは、
モリアをぶっ飛ばしに行くからよ!!」

サンジ！お前、ナミの事頼むぞ。」

「当たり前じゃアア！！！」ボオオオオ！！！！
うわ熱い！！燃えてるよ。」

「おれはガイコツの戦いが心配だ、そこへ行く！」

「そこおれも付き合っぜフランキー。」

“伝説の侍？のゾンビってのがどれ程のもんか興味をそそる。
そついやツバサ、お前刀さしてるけど刀使えんのか？」

ゾロが海星に気づいた。

「少しね、俺も昔は世界一の剣豪目指してたんだ。
これ借りてくか？この間一本折れたろ。」

「いやいい、これから奪いに行くんでね。」にやり

「伝説の剣豪か・・・
じゃア俺はお前の影でも倒しに行くよ。」

「ほう、おれを倒そうってのか？」

「まあね腕試ししたいし。」

ルフィ！俺先行くよ！！雑魚狩って道開けとくから！！
そう言うって俺は獣人化した

「わかった！！」

「「「^{ソル}剃！！！！」」」ビュッ！！！！

モリアのダンスホールに続く橋

ーッスッ!!

目の前にはたくさんのゾンビ兵。

さてと狩りますか!!

「来たぞ!! 捕まえろ!!」

「ウオオオオ!!」

一体のゾンビのかけ声で一斉にこちらへ襲いかかってくる。

そういえばウソツプがゾンビは火に弱いってたな。

「嵐脚」ランキヤク “火車切”かしゃぎり?!?! “ボオウン!!”

炎を纏った斬撃がゾンビ達を襲う。

「ギヤアアア!!」

「うお!! 炎だ!! 腐れやべー!!」

ホントだ超効いてる。

人化 シュルル

「指銃」シガン「連塩弾」れんえんだん?!!!!」

ビュビュビュビュビュビュ!!!!

俺は指銃の速度でゾンビの口に、
ウソップの作った塩玉ソルトボールを押し込んだ。
海星に斬られた時と同じ様に、
ゾンビ達の口から黒いものが出ていく。

「あれが影か……」

「何だ!!あいつ腐れやべー!!」

どどどどどどど 「!?!ルフィ!!」

見るとルフィが走って来ていた。
その後ろにはロビン、ウソップ、サンジ、
チョッパーもいた。

「ハア 追いついた。」

お前のおかげでだいぶ楽に来れた。
ありがとな!!」

ヒューン

「!?!」

ポコオン!!

「何だ!?!うわっ崩れる!!」

急に地面が崩れだした。

俺は獣人型（紙絵武身）になりロビンを抱え逃げた。

「ハア・・・危なかった。」

おれはロビンをおろした。

橋が半分崩れていた。

「何か巨大なものが橋の上に落ちてきたみたいね。何が落ちてきたのかしら？」

「そんな事よりウソップとサンジ落ちてったけど大丈夫かな。」

「置いてくのか!!?」

心配そうにチヨッパーが聞いた。

「おう!!大丈夫だあいつらは!!」

「そつだな!!急ごう!!」ダダッ!!

黒幕（後書き）

ふれんどりーふぁいやーさんの技案使わせて頂きました。
これからも募集続けますので気軽に感想に書いてください。

キャラクター設定（前書き）

明けまして有り難うございます！！（震災もあったので一応）

12000ユニーク、88000PV突破！！

前のキャラクター紹介で説明しなかった容姿などです。

まだ未使用の技もあるのでネタバレ注意。

キャラクター設定

ツバサ

異名“鷹爪のツバサ？”

懸賞金1億ベリ―

元「CP9」
シービーナイン

容姿

身長172cm

体重？kg（想像で）

スタイル

果実はナミ達よりは小さい（果実が何かは察しろ）
ウエストはナミ達の中で一番細い。

服装

前 ぶかぶかのフードのついた上着に長ズボン。

現在 ナミのおさがり（前の服は全て捨てられた）

髪型はマダム・シャリーと同じで、

目がミホークと同じ感じ。

戦い方

悪魔の実「トリトリの実」モデル“鷹”
ホーク？

能力と剃の併用によりCP9では最速だった。

「生命帰還」
せいめいきかん 「紙絵武身」
カミエフシン

通常よりパワーは落ちるがスピードが増す。

六式全般（特に「剃」
ソルと「嵐脚」
ランキヤク）

「嵐脚」
ランキヤク “巨大斬”
ビガーザン？

自分を中心に円を描く様に放つ斬撃。

“ 刀羅斬 とうらみげ ”

縦に打ち上げる様に放つ斬撃。

“ 火車切 かしゃきり ? ”

炎を纏った斬撃。 (読者案)

“ 飛刀擲 ナイフエッジ ? ”

無数の斬撃を放つ。 (読者案)

“ 龍尾 りゅうび ? ”

龍の様にしなる斬撃を放つ。 (読者案)

「 嵐手刀 ランシュトウ 」 嵐脚の手刀版。

「 嵐爪銃 ランソウガン 」 爆風を起こす指銃。

「 天切剃刀 テンキカミソリ 」 トリトリ、剃、月歩、生命帰還の併用による最速移動。

(読者案)

武器

“ 海星 かいせい ? ” フランキーの造った海楼石で出来ている日本刀。

“ 海星 かいせい ? ” 刀羅斬 とうらみげ ? ”

嵐脚のより威力が高い。

居合 いあひ “ 閃 せん ? ”

光が走るように見える。

キャラクター設定（後書き）

（読者案）は募集した技案の中から選んだものです。
技案の募集はやめないののでどんどん書き込んでください。

ツバサVSジゴロウ(前書き)

13000ユニーク、91000PV突破!!!
キャラクター設定を改正しました。

(少し付け足しただけです。で気になる方はお読みください)

ツバサVSジゴロウ

「フォス フォス フォス!!!
一人取り逃がしちまったがどうだ!?
仲間達の力で取り抑えられる気分は!!!」

俺達はモリアのいるダンスホールへ続く部屋についた。
しかしそこにはホッグバグが待ち構えていて、
ロビンとチョッパーはサンジとゾロの影の入ったゾンビ、
犬ッペとジゴロウに捕まってしまった。
俺はと言うと気配を消しチャンスを伺っている。
チョッパーには逃げる際に伝えといた。

「フォス フォス!!!」

さアシンドリーちゃん、こいつらにトドメを刺せ!!!」

「はい」

「.....ここまで悪党だと、
気持ちいいくらいだホッグバグ!!!」

「.....ん〜!?!」

「実際にすごい数の人達の命を救ったお前を、
医者として本当に尊敬してた。
ゾンビの研究だってそうだ。

「死」は突然やってくるから・・・
“死んだ人?にも“残された人達?にも、
言い損ねた言葉がたくさんある筈だ。

何年もなんて言わねエ、たった数分でもいい……！！
もう一度死者を呼び起こす手段があるのなら……
たとえそれが「邪道の医学」と石を投げられても、
それで救われる人の気持ちはデカイ。
だから“死者の蘇生”を研究するとういうお前の言葉に、
……やっぱりスゴイ医者だと思ったんだ。」

「フオス フオス……！！バーカな……
他人の為になぜそこまで……！！
昔の話もそうさ……！！

おれは、ただ天才だっただけ！！
迷惑なモンだ面倒臭エ……！！
そこいらのバカ医者共に救えねエ命も、
おれなら救えちまう。

こんな天才の悩みがためエにわかるか……！！？
とんだ思い違いだぜバカトナカイ……！！
このおれに医者の方あり方なんぞ説こうつてのか……！！？」

あーイライラする、そろそろ相手も油断してるしいいかな？

俺はロビンの咲かせた耳にGOサインを出した。

「（いつでもいいぞ……！！）」

「（分かったわ。」

「チョッパァーいいわよ）」

ロビンがチョッパァーに能力で伝える。

「（わかった。」

そんなつもりは毛頭ねエ。

おれはもうお前を医者だとも思ってたねエんだ……！！
物を言えない死体を使って……

お前は怪物を生み出してるだけだ……！！」

「たいした医術も持たねエで“命？を語るんじゃねエよ海賊鹿！！！
殺せシンドリーちゃん！！！！」

おめエら二人は没人形にする、喜べDr・チョッパー！！
死んだ暁には尊敬するこの俺の助手にしてやるってんだぜ！！！！」

「「角皿刀」一枚二枚三枚っ！！！！」ビュ ビュ ビュ
シンドリーがチョッパーに向かい角皿を投げる。

「うおおおお！！！！」ドドッ！！！！

「！！」

ズババツ！！！！

ガシィッ！！！！「！！！！？」

チョッパーは体が切られるのも構わずシンドリーを抑えようとする。
「止まれ！！！！」

「この・・・」バリィン バリィン！！！！

シンドリーは持っていた角皿をチョッパーに叩きつけた。

しかしチョッパーは手を離さなかった。

「チョッパー！！！！」

「かわいそうに・・・！！！！もう死んでるのに！！！！

残された家族がこれを知ったらどんな気持ちだ。」

「手を放せ・・・！！！！」ドス！！！！

掴んでいるチョッパーにシンドリーが蹴りを入れる。

「一緒に生まれ育った“心？はもう死んでるのに、

体だけは人の言いなり動かされるって一体何だ！！！！？」

「フォス フォス！！！！てめエの目を疑うのか！！！！？」

「許さん！！てめエも“没人形マリオ？にしてやる！！
殺れジゴロウ！！！！」

ジゴロウが刀を構える。

「来るか・・・」

「三刀流さんとうりゅう“百八？”

「“海星かいせい？”チャキ

ツバサも刀を構えた。

「“煩惱ぼんどう鳳ほう？！！！！”ドウン！！
ジゴロウが三本の斬撃を放つ。

「“刀羅斬たうらざん？！！！！”ズザア！！
ツバサは縦に斬撃を打ち上げ相殺した。

打ち上げた斬撃は天井に穴を開けた。

ボゴオン！！！！

「すごい力、流石はゾロだな。（手がジンジンする・・・）
ただど負けるワケには行かない！！

「嵐脚らんきゃく”龍尾りゅうび？！！！！”シュツ！！

龍が飛ぶの様にしなる斬撃を放つ。

「“刀狼流とうろうりゅうし？！！！！”“！？”

ジゴロウは斬撃を受け流し迫って来た。
「くっ!!」「剃ソル」「
剃を使い一旦距離を取る。

「鬼おに?」ダツ!!

「チツ!!」「嵐脚ランキヤク」、

ナイフエツジ

「飛刀擲ナイフエツジ?!!」「シュ シュ シュ シュ!!」

迫るジゴロウに向けいくつもの斬撃を放つ。

だがジゴロウは全て受けきり突っ込んでくる。

「斬りきり?!!」「ズバン!!」

ジゴロウはそのまま刀を振るうが、
しかしそこにはツバサはいなかった。

「どこに行つた!?!」

「ここだよ!!」「!?!」

頭上から声がする。

「喰ラシらえ!!」「嵐脚ランキヤク」、

かしゃきり

「火車切かしゃきり?!!」「ボウン!!」

ジゴロウは避けれずまともに喰らい辺りに煙が舞う。

決まったか?

しかし煙の中には人影が立っていた。

「何!?!」

「” 焼鬼^{やきおに}?」 ダツ!!

「くつ!! 避けきれない・・・!!」

「 “ 斬^{きり}り?!!” ズバン!!」 がはアっ!!!!」
ガクン

ツバサは横腹を斬られ片膝をつく。

「 “ ツバサ!!”」

チヨッパーとロビンが駆け寄って来る。

「ハア・・・ハア・・・強エ・・・

相手がゾンビで良かった・・・

(くそっ今の俺は体が弱過ぎる・・・鍛えないと・・・)

ジゴロウは燃えているため浄化されてしまった。

もし相手が本物だったら確実に負け殺されていただろう。

ツバサは意識を手放した。

「くそっ!!」 ダツ!!

ホッグバツクは逃げ出した。

「あっ!! までコノヤロツ!!」

チヨッパーが追いかけてよとする。

ドゴゴゴオン!! 「え!!!?」

いきなり壁と床が崩れた。

壁を突き破って来たのは通常の巨人の二倍のサイズの “ 魔神? オ
ズだった。

「ル・・・ルフィのゾンビ!!!!」

「床が崩れる！！チョッパーこっちへ！！」

ピョン たたんっ！！「危なかった！！（汗）」

「……………これがルフィ……………!?」

「ツバサを安全な場所へ運ぼう!!」

「ええ。」

ツバサVSジゴロウ（後書き）

影とは言えゾロが女に負けてしまうのは可愛そうかなア？

と、思ったのでこう言う感じに・・・

またふれんどりーふぁいやーさんの技案使わして頂きました。

ありがとうございます！！

宴（前書き）

100000PV突破です！！！！ありがとうございます！！！！

総合評価も200ptを超えました！！

こんな駄文にお付き合いいただき本当にありがとうございます！！
これからもどうぞよろしく願います。

宴

ドゴォーン!!!

んんんんんん… 何だ…!??

「ツバサっ!!! 目覚めたのか!?!」

俺は寝ていた様だ。

「チョッパー? ルフィの影は!?!」

「ルフィの影の入った巨人とモリアも倒して影も全て戻ったんだけど…」

「どうかしたのか?」

「王下七武海“暴君”くまが現れたの!!! 私達を抹殺しに来たらしいわ!!!」
「チョッパーの代わりにナミが答えてくれた。」

「七武海がもう一人!?!」

「そうなんだ!!! 今ゾロが戦ってる。」

「俺も行って来る!!!」ダッ!!!

「ツバサっ!?!」

「おらアー!!!」
「ピュッ!!!」
ぷにつ!!!

ガシャァン!!!「ぐあ!!!」

「ゾロ!!!」

ゾロがくまに斬りかかるが肉球で弾かれてしまった。

ゾロは立ち上がるうとするが後ろにはくまがいた。

「ゾロが危ない!!!」

ツバサがくまに向かって走っていると、
もう一人、くまに向かい飛んでいる者がいた。

「サンジ!?!」

「そこまでだ!!!」ギョルル「コンカッセ粗碎?!!!」

ガコオン!!!

サンジがくまの顔面を蹴る。しかし、

「おああああ...!!!」

...!!?何だ!?!コイツの固さ...!!!

顔は鋼造りか!!?」

サンジが痛みに足を抱える。

「ひ・・・ひ・・・!!」 “火の鳥星?!!” ボオオオ
ウソップがくまに向かって撃つが、

ぷにつ・・・ボウ

やはり弾かれてしまう。

「危ない!!嵐脚!!」 ドカアン!!

ツバサは斬撃で相殺した。

「お前が“鷹爪?か・・・”

「“剃”!!“海星?、” “刀刺銃?!!” ビュツ!!

ツバサは剃でくまに近づき、指銃の速度で渾身の突きを放った。
くまは肉球の付いた手の平をツバサに向ける。

ぐさっ!!

「っ!!!??」

海星はくまの手の平に刺さった。

「肉球で弾かれない!?ゾロの攻撃も効かなかったのに!!!??」
ウソップがツバサの攻撃が通じた事に驚く。

くまは手から大気を圧縮して作った爆弾を飛ばした。

「ウルススショック
熊の衝撃？」

ドォーン！！バリバリッ「！！？」

「ぐああああ！！！」

周囲にあつた物を全て吹き飛ばした。

ダメだ……意識が……

「おい……生きてるか……！！みんなア！！！」

「んんっ……助かった……！？」

辺りを見回して見るがくまはいない。

くまが全員死んだんだと勘違いして帰ったのかも、
とナミが言っていたがそれは違うと思う。
まあ助かったんだからいいでしょう。

ルフィ達が騒いでいる。

ルフィの疲れが何故かとれ、体も軽いらしい。

「あれっ！？ゾロは？」

「本当だ、あの野郎どこだ？……まさか……！！」
「探しに行こう！！」

「いや、いい……おれ一人で行く。

ツバサちゃんはみんなと一緒に寝てろ。」

「う……うん。」

サンジの奴なんかいつになく真剣だな、
きつとなんかあつたなこりゃ……
まアお言葉に甘えて寝るか……

一日後

ゾロはボロボロで見つかった。
その後直ぐに寝てしまい、まだ起きていない。

「それにしてもゾロの奴ボロボロだね。」

「やっぱり私達が気を失っている間に何かあったのかもね」
ナミが考え込む。

「あの男があのまま帰ったとは考えづらいものね。」
ロビンも同感らしい。

「もしかしてゾロ、俺達の事庇ったりしたんじゃないか？」
ゾロは本当に“男”って感じの性格してるからなあ

「あいつの事だからあり得るわね・・・」

三人でチョッパーのもとに行く。

「チョッパー、ゾロの具合は？」

「こんなにダメージを残したゾロは初めてみた。
命だつて本当に危なかつたよ・・・！！！！
とにかく今は絶対安静だ。」

「そっか・・・」

「何が起きたか！！実は見ちつた！！！！」

「俺も見ちつた一部始終~~~~！！！！」

モリアに影を奪われていた被害者の中のローリング海賊団。
その乗り組み員のリスクー兄弟が話に割り込んできた。

しかしサンジが二人を掴み連れて行ってしまった。

「やっぱり……何か隠してるんだわ。」

「ロビン。」

「ふふっ、わかってるわ。」

「……成程、あなたの言っていた通りだったわ。それとサンジも身代わりに立候補してたみたいね。」

「サンジが!? ヘエー少し見直したわ……
通りで様子がおかしいと思った。」

おっ二人が帰って来た。」

「口止めされてたからきつと面白いわよ。」

「おい!! お前ら二人!!」

さっき何か知ってる様な事言っただけか?
何見たんだ?」

ルフィが歩いて来た二人に聞いた。

「ヤボな事聞くな。」

「みんな無事で……何よりだ。」

そう言い残すと二人は歩いて行った。そわそわしながら。

「ふふつ。」

「ははっほーんとだ。」

「ツバサちゅアーン!!ロビンちゅアーン!!

ご飯の準備出来たよー!!」

テーブルの方からサンジのデレデレの声がする。

「はア・・・前言撤回、この男は・・・」

「まあいいんじゃない?」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「んんんめ~~~~!!!!」

ばくばくっ!!!!」

被害者達があまりの旨さに叫んでる。

「ディ~~~~ナーアッ!!!!」

「ディ~~~~ナーアッ!!!!」

フランキー達がテーブルで踊り出した。

「まるで宴だな。」

「ふふっそうね・・・」

突然だけど質問いいかしら?」

「何?」

「前から気になってたんだけどツバサさんって何歳なの？」

「25だよ。」

「え・・・！？ナミちゃんより年上なの？」

正直17かそこらかと・・・」

え！？何この予想外だったよみたいないな感じは！！

こんな驚いてるロビン見たの初めてだよ！！！！

「それじゃあアイスバーグさんの暗殺の依頼の時12歳になっちゃ
うよ！！！！」

「あ、確かに・・・！！」うっかり！！

神様ーロビンってこんなキャラだっけエー！？

「冗談よ。」

「冗談かよ！！！！」

「あなた急に子どもっぽくなったり大人びたりするから気になった
だけよ。」

あーそういうこと・・・

まあ確かに中身は高校生だしね。

学校では大人っぽいって友達にも言われてたしなア。

俺達はその後も宴を楽しんだ。

宴（後書き）

いきなり話が飛んですいません！！

やけに主人公がロビンと親しくなりました。

感想等心より待ってます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1436z/>

ONE PIECEの世界に転生

2012年1月5日01時50分発行